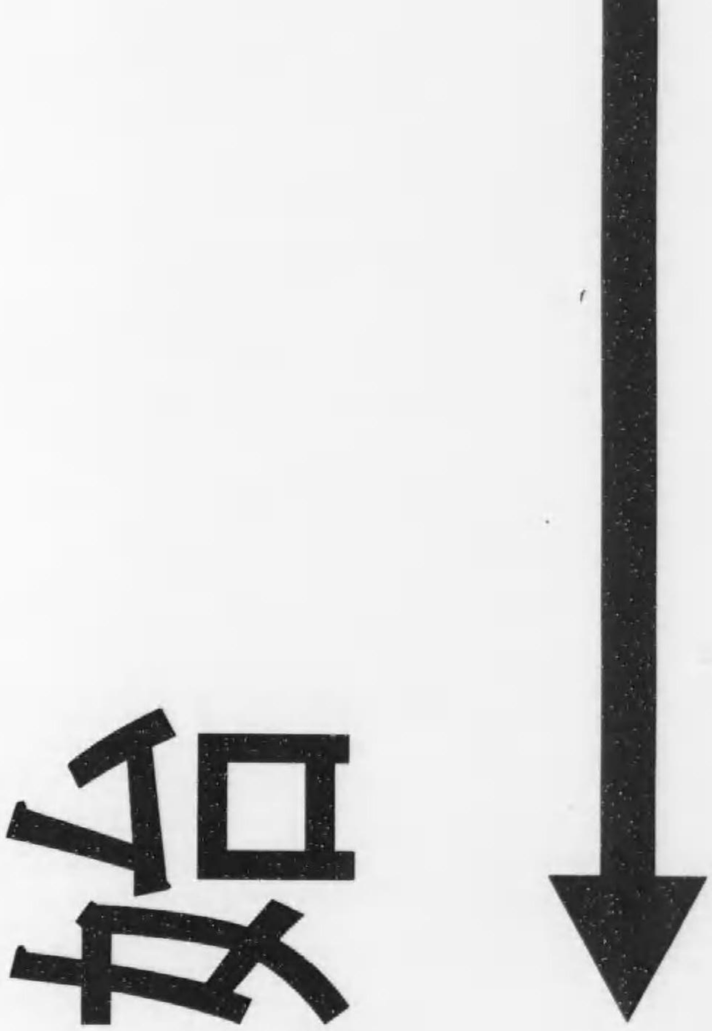
設

5 6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 6

576
778

15.3.9

獨歩病牀錄

國木田獨歩 作

獨歩叢書

X

新潮社版

獨歩叢書 〔10〕

獨歩病牀錄

新潮社版

大正
14. 9. 29
内交

516-378

○

余はこの書の序文中に或る事を明かにせんと思へり。されど思返へしてやめたり。何の益もなしと信じたればなり、この書を傷くるを畏れたればなり。

余は余の思ふ道を正しく行ひ得たりと信ずれば、それで澤山なり。

唯この書の成立を云はざる可からず。

余の獨歩氏に、田山花袋氏の紹介にて始めて面會せるは五月二日なり。其時氏は病院生活の甚だ索寞にして無聊に耐へがたきを慨く。余氣の毒に思ひ、幸ひ余は獨身にして係累なし、何所に居るも同じ事、當分こちらに滞在してお話相手にならんと云ふ。獨歩氏も喜び田山氏も喜ぶ。その夜花袋氏私かに余に曰く、君の厚誼を謝す、余等友人の爲めに獨歩の臨終を見とゞけ、それを世間に發表せよと。余出來得る限りを盡さんと誓ふ。

五月二日歸京、三日又鳳葉先生と南湖院を見舞ふ、一泊して四日歸京。家事の始末して同八日又茅ヶ崎に行き、六月二十七日遺骸送京の日まで滞在す。その間一晩泊りながら東京に歸りし事二回。

當初余の考は、慰藉の傍、或る仕事をなさん計畫なりき。されど獨歩氏は余を枕側より

離すを好まず、余も亦離るゝに忍びず、毎日朝八九時より午後五六時まで病室に詰切りて、くだらぬ無駄話に氏を慰めたり。咯血後はなるべく遠慮するやうにせりと雖も、猶ほ一日一二回の訪問を缺かせる事なし。仕事なぞ出來るものでなし。黄昏困憊して寓に歸れば、一壺の酒に醉うて直に眠る。讀賣新聞に掲げたる通信文(本書の附錄)でさへ余には甚しき重荷なりき。

されど余は悔む所なし。藝術の上に修養の上に多大の賜物ありしを信じたればなり。余は喜んで茅ヶ崎に滞在せり。

獨歩氏は熱誠自然の人なり。病床にあるも元氣少しも衰へず、氣焔、警句、好諧、口を突いて出づ。余これを一人聞棄つるに忍びず、日記の端にその二三宛を書付けて、他日の備忘に供ふ。

五月十八日なりしと思ふ。果實を買求めながら歸京せる時、話の次手、これを橘香君に話す。橘香君曰く、太だ面白し、獨歩氏の意氣睹るが如し、出版しては如何にと。歸つてこれを氏に諮る。氏も喜びて、曰く可也、たゞ君自らその勞を惜しまざれば好し、普通の速記者や何かは御兎蒙りたしと。余にありては毎日二三枚の事一擧手一投足の勞なり、謹んで勞力を捧げんと白す。

これ病牀錄出版の動機なり。且つ獨歩氏は挿畫意匠等を小杉未醒氏に依頼せんとて、恰も同氏の見舞に來れるそ幸に、病室その他のスケッチを囑す。

氏、『余久しく活字に遠ざかる。美麗なる本を作りて友人等に頒つも樂みなり。』とて、出版を余に急ぐ。余爲めに一人の助手を得んを乞ふ、中村武羅夫君を東京より招きたる所以なり。君の茅ヶ崎に滞在する殆んど二十日、一日と雖も枕頭を離れたる事はなし。

唯、今にして口惜しきは、この書全く獨歩氏の校閲を經ざりしことなり。五月下旬以來、病勢日に募り、始終熱と咳嗽とに苦しむ。其間にありても氏は出版をあせりて常に余に校閲を迫る。されど、余等としては、爲めに心神の疲勞を來さん事を悲しみ、一日延しに明日は〳〵と臨終の日に至れり。

校閲は得ざりしと雖も、書中記する所殆んど謬謬なきは余等の信ずる所なり。その日その日の日記にヒントを書付け置きたるものなればなり。

唯、その各節は普通座談の中より、各々面白しと思ひたる所を各自記せるものなれば、其間何の脈絡も統一もなきが如きは、是非もなし。且人の話は朝と夕に變る者なり。聞く

者も亦己の思考に合せる方面のみ書きたがるが常なれば、一部通讀の際には少なからざる矛盾や重複を發見すべし。今これを改めんとすれど余の如き凡下の徒にはその果して何れが眞、何れが誤なるやを知るに苦しむ。敢て毫末の修正をも加へざる所以なり。

書中五の四は余の記するところ、殘りの一は中村君を勞せり、その大部分にはN生と區別しあり。

明治四十一年七月六日校訂終るの日

眞山彬

この書は余の勞力を全く捧げて、獨歩氏藥餌の一端に供せんとせるものなり。氏も亦これを諒とせり。余はこゝに素志を貫き謹みてこれを遺孤虎雄君に呈す。

目次

第一　死生觀……二
第二　人物觀……三八
第三　戀愛觀……五五
第四　藝術觀……七三
第五　雜觀……一一六

○

前額記……一三九
前額記——趣味の數々——死と自覺——趣味に就て——不可思議なる大自然——モデル問題——雜談——予が作品と事實——机は部屋の置物——奈何にして小說家となりし乎

○

附錄　獨歩氏の病狀を報ずる書……眞山青果……一八三

獨步病牀錄

國木田獨步述
眞山青果編

第一　死生觀

死は遂に問題なり

○

死は遂に問題なり、正確なる事實として、痛切に吾人に觸るゝこと、恐らく無からん。少くとも余に於ては、この當然嚴肅なるべき事實を單なる思索上の問題としての外に取扱ふことを得ざるなり。

一念、死の問題に到達するごとに、常に吾が死の甚だ遠からざるを知る。余の疾病は惡性の肺結核なり。羸瘦斯くの如く、衰弱斯くの如し。斯くの如き人の永く活きたるためし無し。余も亦近々この世をお暇乞すべき人の一人なるを知る。

知ると云ふ字を記せよ。

同時に又、總ゆる人は總て死すべきものなる事を知る。

健康を矜る人の前に試みに、「足下は死す可き乎」と問へ。其人必ずや、「然り、生物たるわれなり、必ず死すべきを知る」と答ふ可し。何の躊躇、何の顧慮なく、立派に、當然と云ふ顏付して答ふるなるべし。

要するに總ての物は逝くなり。嘗てありし總ての人に來りし如く、死の何人にも遂に免れ得ざる運命なることは、壯健の人も半死病餘の余も共に同じく知る所なり。知りかたも矢張り同じく知るなり。

「君は明日に死なんも知れず」と云ふに、否と答へ得る人、恐らく世に一人だもあるべからず。

余が前に、死の甚だ遠からざるを知ると云ひしは、總ゆる人が知ると同じやうに知るなり。知ると云ふよりは承認するなり。せざらんとするも得べか

ちさる底に知れるなり、承認せるなり。

余一人のみ御多分に洩れたるにはあらず。

健康の日と、病衰の今日と、同じ心もて余は死の遂に免れ得可からざるを知る。唯、死を想ふ機會の較多くなりしと、健康の日よりも比較的死の間際に近づきたらんことを知るのみ。其他に於いて一も異なることなし。

知るなり、唯知るなり。白狀すれば余は家族に向つても、又友人に宛てたる手紙にも、死に對する恐怖と感想を數々述べたり。憐憫同情を强ひたる文字言葉すらその内に交ぜてそを爲したり。然かもそを全くの虚僞と云ふを得ざるは、余の智識と比較とは總ゆる樣式を以て、余の死の近づきたる事を知らしめたればなり。余をして免れぬ場合と觀念せしめたればなり。

然かも、思ふに、知ることは單に知ることなり。觸るゝことにあらず。思ふことにあらず。如何にしても免れぬ場合と知りながら、余は遂に死すとは、

到底自ら思ひ信ずることを得ざるなり。

死とは何ぞや、四大空寂に歸し、細胞は解け、纖維は溶け、原子は原子に、元素は元素に還ることならずや。窓外に見ゆるこの自然の中に空しく消散することならずや。かの砂、かの松の間に殆んど空間も時間も無き或る物質(サブスタンス)に復することならずや。これ信ずべきことなりや。將たまた是非とも信ぜざる可からざることなりや。

然らば、玆に吾あるを如何せん。國木田獨歩は儼として玆にあり。目に見よ、耳に聞け、心に知れ、吾が身體は立派に、嘘で無く、明白に、この病牀の上にあり、この吾を如何にせん。この人死して、かの自然の中に散失すと君は信じ得るや。知ることは得べし。然かもそを思ひ斷ずることを得るや。

他人の事なり。君或は思ひ信ずるを得べし。されど、吾は吾が事なり。如何にしても思ひ信ずるを得ず。

余は何うしても死ぬやうな氣がしない。

問題としての死は、或は神祕に、或は深遠に、或は嚴肅に、或は態とシヤレて滑稽に論ずることを得べし。事實としての死は遂に死ぬまで吾人の胸に痛切眞摯に觸れ得ざるものゝ如く思はる。

一度死んで見なければ、眞の死を事實として取扱ふを得ず。

要するに、古來幾多の死生觀は單に問題に過ぎざる可し。人を後にし、事を先にし、總ゆる死に關する智識を綜合して、死とは同ぞやと論じたる閑事業に過ぎざる可し。

人の存する間、其人に死なし。

五月十一日午後、雨降る日、窓外を指して物語らる。其頃は特に雨の日を喜びて、シト〳〵と音もなく砂地に滲入る聲を聞けば、自ら神冴ゆる心地すと云はれたり。又病狀は惡しきながらも正格（ノルマール）の經過を取れる時なり。（青果記）

○

神は自覺也

余は死を見たり

何故に神は地に降らざるや。

神は自覺なりと思ふ。否乎。

神の道は鳥の路を尋ぬる如く難し。

○

神を見たる人あり。余は死を見たり。極めて瞬間的なりと雖も、余は三度或は四度そを經驗せり。

其最も明かに條理的なる一回の經驗を云はん。卽ち斯くの如し。

一日の中、余の最も苦痛を覺ゆるは、薄暮たそがれの時なり。海の風は陸の風と相剋してそこに聲無く、晝は夜と相鬪うてそこに光りある無し。鳥は翅を收め、花は色を消す。この時四隣人定りて、コトリとも響なく、空は重く海は暗らし。

自分一己より云へば、恰もこれ潮熱の時なり。臟腑を熱し筋骨を熱するの

身熱、潮の滿つる如く、次第に時を追うて寄せ來る。呼吸は速迫し、咳嗽頻りに出でんとして、先づ咽頭に異樣の痒癢を感ず。この苦痛遂に堪へ難し。

さる場合、余は唯だ心を四周の寂寞に移して、强ひても此の自然裡に同化せしめんと勉むることゝせり。出來るだけ自覺を殺すなり。如何となれば、此時の余は氣重く體懶く、話すも聞くも、指一つ動かすにさへ極めて强き抵抗と億劫さを感ずればなり。死なば死ねの氣となり、自らを抛棄して、自然のあるが儘に自己を託するの稍々安樂なるを知ればなり。

人間なり、左樣思ひたりとて、さう樂々出來る譯にはあらざれども、先づさうして試むるのなり。

二三日前のことなり。余は常の如く牀上に仰臥し、三昧して無念無想の境地に入らんと自ら力めゐたり。その時、閃光の如くわが目に來る者あり。亡父臨終の顏の如し、慥かに父の顏なり。去る。次に來る人あり、そは余なり、

肉落ち骨立ち見るに堪へぬ衰弱の眸もてヂロリと吾を見たり。直ちに去る。

次に來りしは吾が涙なり、頰の熱きに驚けば、潸々流下して止まざる吾が涙なり。而して、同時に、

「吾は死するに非ずや。」

と云ふ感情、閃光的に吾が軀、吾が心に漲るを覺えたり。而してこれを思ふと共に、更に新しき涙はおのづから枕に落つ。

余は、これを死の自覺なりと思ふ。その時の驚駭よ、心臟は跳動すと云ふより、寧ろ血行は冷凍しぬ。

二三分にして余は以前の余なりき。藥餌に肉汁に又多忙なる病人なりき。その他の經驗も稍々これに同じ。余は如何にしても、この時の心的狀態を委さに他に說明するを得ず。殘念なり。されど事實なり。余は飽くまでこれを死の自覺と言張る可し。

人は多くその生涯中の大事を詩化せんとす

梁川君の見神と云ふも、想ふに這種の經驗に外ならざる可し。疑ふを止めよ、これ有り得べき事なり。

人は好奇心によりて興味を購ふ。余は其後幾度か自ら勉めて以上の實驗を繰返さんと勉めたり。されど駄目なり。望む時に來りし例曾てなし。

○

人は多く、その生涯中の大事を詩的ならしめんとするものなり。戀愛と死と此二つに於いて特に然り。されば、世に眞にその戀を描けるもの尠きが如く、その死際も亦大いに潤色せられ、詩化せられ、多くは甚しき改竄添削を敢へてせらるゝものなり。

○

余の臨終を見よ

余は酷しく嘘を惡む。特に況んや人生の大事、最も嚴肅なる事實を前にして、臨終に猶ほ嘘を敢へてして恥ぢざる人の陋劣無恥を憎む。余の臨終に注意せよ。余は必ず些の嘘なき大往生の形を示さん。死を欲せざれば欲せずと泣き叫び、欲すれば欲するやうに、明白に正直に死なん。

死は咒語也

斷末魔にグッと見得をなして倒るゝは役者の死態なり。余は芝居をするが大嫌ひなり。古人の傳記を讀みて、その矯飾せる臨終の條下に到る毎に、余は度々怒と失望とに其書を拋ちたり。

これ余等の度々聞ける所なり。而して獨歩氏は望む如きの正直なる往生を遂げたり。余等故人の最後まで自ら欺かざるの人たりしを喜ぶ。

○

永久と死とは、今の余に取りて、全く不可解の問題なり。謎にあらずして咒語なり。人類はこの祕密を開く可き鍵を永遠に遺失せり。

余や年少氣鋭の頃、何の分別も躊躇も無く宗教界に入り、牧師の脣に迷信して、絶對及び死の如き、極めて重大事を極めて無造作に論じて、論じ得た

りとせる時代あり。今にして思へばその輕薄自ら顏に汗するを覺ゆ。

○

一去三十年、これ淵明の句なり。一去四十年、或は六十年、人生一事總て斯くの如し。

一去三十年

○

營業稅と所得稅

疾病は死に對する營業稅ならば好し。如何なる苦痛、如何なる惡戰にも猶ほ忍ばん。されど、死に對する所得稅、附加稅なりとせば人は如何にすべき。余の疾病は全治する見込ありと云ふや。假令全治せずとするも、枕頭筆硯と親しむの時を一日の唯一刻に於ても與へ得る見込ありと云ふや。せめて數日、柳島(茅ケ崎南方の河口。病院より二丁餘)に綸を垂るゝの間を得せしむるの見込ありと云ふや。果して在りと云はゞ、余は如何なる苦痛をも喜んで辭せざる可し。

人生惟一の驚愕

嗚呼、足の地を踏まざること、茲に殆んど百日。

余や何の宿業ありて、唯死を待つ爲めに苦しみ、悶え、泣き、痛を忍ばざる可からざるか。是等の酷稅を拂ひて購ひ得る所のものは、單に死と云ふ一字なりとは、極めて殘酷ならずや。何うで死ぬ者なら一日も早く死にたい。

余はかゝる際に、生の意義も死の意義も無しと思ふ。

○

人生惟一の驚愕は恐らく死の外に無けん。余嘗てこれを『牛肉と馬鈴薯』の中に記せり。

○

今の余に最大の敵は發熱なり。頻咳、呼吸切迫、胸痛、皆これに伴ふ。幸に咯血なきを以て稍々自ら慰むるに足るも、斯くの如くしてまで活きざるを得ざる程なら、余は寧ろ自ら殺すの甚だ容易なるを覺ゆ。

結果を死と豫期して、余に尙ほ藥餌を與へて永く活きしむると、余に瞬間の自由を得せしめて長く此の不安より免れしむると、其慈悲果して幾何ぞ。

これ考察すべき人道問題なり。

獨歩氏この頃の病苦に堪へ兼ねて、ピストル又は短刀等の兇器を枕頭に置かん事を常に家人に迫りし事實あり。

○

古來の宗教家、死に處するの法を說くこと、甚だ明瞭にして而も甚だ簡單なり。永世を信ずるに非ざれば卽ち一切を併せて空寂に歸せしめんとするに過ぎず。渠等は過去と將來とを繫ぎて、纔に現在の病苦より救はんとす。迂なり。死を死として說け、神も將來も無く、而かも尙ほ現在より救へ。然る時、始めて渠等に權威あり。われ等に安心あらん。

死する者は箇々人々なり。複數なり。そを極めて明瞭簡單なる一繩に結び

超越とは無關心也

て救濟せんとす。固より其甲斐ある可からず。

余の死するは余一己の事なり。萬人に通ずる法を以て余をも併せ救はんとす。駄目の皮なり。

余は余の爲めの法を聞かんことを望む。

複數の主格（サブゼクト）に單數の客格（オブゼクト）を置かんとする、既に謬れり。

○

余の聞ける限りに於ても、安心立命、從容として死に就けるもの、由來其人に乏しからず。されど、余は思ふ、渠等は未だ眞に死に觸れたる人には非らざるべし。いざと云ふ場合になりても、尙ほ從容自若たる人あらば、その人恐らくは喪心し、恐らくは生死の境を超越せるならん。この場合、超越の字面甚だ謬られ易し。余の云ふ超越とは無關心なり、今死する今の間際まで生死その何れも思はざりし人、否、思ひ得ざりし人を指すなり。斯る意味に

於て超越せる人少し。

人間の生理欲

○

余、今にして人間の生理欲の太だしきを知れり、病牀に臥する殆んど歳餘。半死の身の憶ふ所は何ぞや。絶對、無限、神、愛、曰くそんなものでは無い。名譽も榮華も望まぬ。唯、口の欲、目の欲、性の欲、それのみ。然かもその欲や甚だ急なること健康の日に數倍す。淺間しと思へど詮なし。

嘗てこの病院に入院せる心臟病の患者、病革りて殆んど一刻を爭ふの時、傍の人試みに其欲する所を問ふ。其人曰く、「早く癒つて、鰹魚の刺身に好い酒、友禪の美しき半玉を買つて見たい。」と。蓋し人間本來の聲なり。人の欲望は將來の大なる欲望の爲めに僅に制せらるゝものなり。

疾病は不自然也

○

疾病は不自然なり。人をこの地に置ける、神本來の意志と矛盾す、扞格す、抵抗す。奚んぞ殺さゞる、奚んぞ殺さざる。

直に大自然に面せる時

○

余は、大自然と相面して、自己の隻影を顧みる時、今更の如く吾が生の孤獨と荒凉と不安とに堪へず、何物か神祕の力に賴らんと欲するの情極めて切なり。

此大自然と相面して、宇宙の不可思議に驚異するなく、驚異するも、何物をか希求するの念起らざる人あらんか、そは未だ此大自然に、的確に、眞實に、相面せざる人なり。虚僞なる幻影に欺かれたる人なり。作られたる感情によりて、自らを欺きたる人なり。

キリストが四十日四十夜、曠野を彷徨ひたるを看よ。釋迦が菩提樹下に退きたるを看よ。西行が世を遯れて浮漚の旅に行脚の生を送りたるを看よ。彼等は實に大自然に眞實に相面し、生の孤獨を痛切に感じて、何物をか求めん

とするの情、火の如く熱烈なりしなり。

人は其習慣の虚偽なる生活を脱して、直に大自然に相面し、第一義なる人生の根本を衝く時、其處に必ず生の孤獨と悲哀との閃く影を見む。痛切に胸を打つものは、此閃く影なり。あゝ斯くして、竟に何物をか求むることなくして止まむや。人の本性は實にこゝに在り。斷崖絶壁に架せられたる橋上に立つて、將に其橋の墜ちんとする時、人必ずや其身を戰かし、其足を慄はして、何物か自己以上の力に向つて救ひを求む。これ總ての幻想を去つて、直に大なる事實に直面すればなり。大自然に對して吾が胸中、此感念の實感として充實し來る時、即ち人は大自然に對して、眞實なる驚異に眼を開きたるの時なり。(N)

○

同情は虚偽なり、虚偽に非ざるまでも誇張せる感情なり。余は他の同情を希はず。

病床に輾轉反側する余を見たる者は、必ずや同情の念あらんも、而も終に余の苦悶と實感を同うすること能はざるなり。余と同じ肉の續かず、同じ血の通はざる二個の個體が、空間に隔てある限り、同情は所詮思ひやりに終らざるを得ず。

若し同情を以て量に測るを得るものとし、之を一匁とせんか、其一匁を百萬倍したるものは實感なり。百萬倍すと雖も、同情の實感に及ばざるや遠し。

個々の異なる人々が同一の實感に觸れ得るは、卑近なる例を以て言へば、酒に醉ふ事これなり。醉うたる間は、少なくも兩個の人々は同一の實感に觸るゝことを得るなり。此の意味に於て信仰は多くの異なる人々が、神なる同一の對象に醉うて、同一の實感に樂しむものなりと云ふを得ん。

○

死とは自己を去ること也

浄められたる生涯

やりきれなくて倒れた

死とは自己を去ることとなり。そこに殘されたる問題あるなし。

○

浄められたる生涯。余はこれを欲すること久うして未だ得ざる一人なり。

○

余は『窮死』の結末に於いて、「どうにも斯うにもやりきれなくて倒れた。」と言へり。自殺者の心事を説明するに、何程考ふるも他に適當なる言葉なく、空しく二日を費して漸く考へ得たるは即ち此一句なり。或日大久保へ歸る途中にて悲慘なる轢死者の最後を目擊して、歸途余は彼の心事を思ひて、ホロホロと泣きながら家に歸れり。其時の感想を材料として、自殺者の餘儀なき運命を描きたるが即ち『窮死』一篇なり。筆を執つても余は泣きつゝ書けり。『窮死』一篇は左迄世評に上らざりしも、余は最後の一句たる「どうにも斯うにもやりきれなくて倒れた」云々の言を翫味して貰ひたしと思へり。

人生と信仰

余の心の鍵

○

宇宙人生の祕義に驚異して、何等か自己以上の力を認めて之に賴らんと欲するは、即ち信仰を求むるの形なり。既に其力の存在を認めて、之に賴るは、即ち信仰なり。而も世には、生の荒涼を感ぜずして終る人あり。感ずるも、求め得ずして終る人あり。

感ずるが幸か、感じ得ざるが幸か、又感ずるも求め得ざるが幸か、這間の消息は竟に神祕なり。然れども、感ずるも可、感ぜざるも可。感ずる人は感ぜざるを得ずして感ずるなり。其感ぜざるを得ざる人々が、感じて感じ得ざる人々を憐れみ、感ぜしめんとする其處に傳道ある所以なり。(N)

○

植村正久氏は始めて余の心を開ける人なり。余の心の合鍵は渠の手にあり。故に余はその鍵を以つて、今の余の煩悶より救はれんとせり。生死の境に迷

へる余の心は、氏の導きに依つて初めて救はる可しと信じたり。

氏は唯禱れと云ふ。禱れば一切の事解決すべしと云ふ。極めて容易なる事なり。

然れども、余は禱ること能はず。衷心に湧かざる祈禱は主も容れ給はざらん。禱の文句は極めて簡易なれど、禱の心は難し、得難し。

誰か來りて、この禱り得ぬ心を救はずや。余は衷心より禱を捧ぐるを得ば、その時直ちに救はれ得可きを信ず。

五月十九日、午後三時、獨歩氏病牀に泣く。

○

處決し得ぬ唯一の問題

余は總ゆる事を處決し終らざれば滿足出來ぬ男なり。漫然去來又一生と云ふが如き態度を好まず。

今の余に處決し得ぬ唯一の問題は靈性問題なり。これぱかりは何うしても處決するを得ず。

拔出したる抽斗を其儘にし置くさへ心苦しきものなり。況んや、一度拔出したる心の抽斗の永生その儘なるは、吾の堪へ得る所なるべしや。

○

男女の獸醫なり

今の醫師は單に男女の獸醫なり。

○

看護婦は素人なるがよし

看護婦は素人なるが病人には快し。患者と共に驚き共に慌てるやうで無ければ何にもならぬ。貧しき智識をたてに、咯血を見ても驚かず、濟しきつて、吾は吾が職分を行ふなりと云ふが如き顏付して患者に望むは、實に實に癪に觸るものなり。

看護婦に權利なし、唯義務あるのみ。一は醫師に向つて、一は患者に向つて。

學術は渠等を神に背かしめたり

薬品を以て疾病を治せんとするは、少くとも不自然なり。醫師よ、去つて鳥は如何にして癒し、魚は如何にして治するやを窮めよ。そこに必ず自然最良の方法あらん。學術は渠等を神に背かしめたり。

○

咯痰は生の分解也

肺結核患者の咯痰は生の分解なり。硝子製の痰壺に浮かず、沈まず、ノロリと溜れるを見る毎に、吾は慄然として畏る。

○

余は枕席方丈の人也

余の前に千里を説く勿れ。百里十里尚ほ説く勿れ。余は枕席方丈の人なり。吾世界この外に無し。殘忍ならずや。

○

余は肉汁を咀ふ

余は肉汁を咀ふ。肉汁は牛肉の營養分のみをエキスせるものなり。されど、肉汁は最早牛肉にあらず。色なく、形なく、生氣あるなし。

今の余が大事業

始めて友人の貴きを知る

余は活きんが爲めに、唯、この手ッ取り早き營養分を攝取せざる可からず。何の趣味も何の興味もそこに殘されず。

世上幾多の目的のみに突進する先生達よ。假令その目的を遂げ得たりとて、決してそはその目的の完成にあらずと知り給へ。目的は常に手段に依りて活くるものなりと知り給へ。

○

余は毎日十幾種の薬を飲まざる可からず。今の身には大事業なり。われ國木田獨歩は斯くの如くして活くる乎。考へて見れば淺間しき限なり。

○

われ病牀に囚はれて始めて友人の貴きを知れり。咳嗽發熱、如何に苦しき時にても、闥を排して入り來る親友の顏を見れば、病半ば癒えたる心地す。余のための注射劑なり。

癇癪は病苦の緩和劑也

○

余の癇癪は余の病苦の緩和劑なり。醫師も友人も只管に「氣を落付けよ」と勸むる所以を解せず。正岡君(子規)の苦痛に堪へかねて泣き喚きしと同じ譯なり。

來年の枇杷

○

苺の時は枇杷を喰ひ得るやを思ひ、枇杷の時は水蜜桃、水蜜桃には葡萄を思ふ。假令葡萄も栗も喰ひ得たりとするも、又來年の苺は枇杷はと思出さる。

物待つ心の不安

肺病に最も切なきは物待つ心の不安動搖なり。然かも二六時中その事斷ゆること無し。熱は來ずや、咳嗽は來ずや、呼吸困難、時に或は恐るゝ咯血は來ずやと、その不安常に念頭を去らず。是と擧ぐ可き苦痛ないだけそれだけその不安甚し。ヂリ〳〵と油賣の地獄に墜つる如きは余の堪へ得る所にあらず。余は寧ろ骨折れ肉痺る如き一番勝負に勝敗を決せんことを思ふ。勝つ、負け、その何れともあらばあれ。

枕頭一輪の花

○

枕頭一輪の草花を見て、余は美を感ずると共に亦痛苦を感ずること切なり。病牀に臥して足一歩も出で難く、根もなき一輪の花を翫賞する身の果敢なさを思へば、痛苦一層切なるを覺ゆ。あゝ何の日か、野に咲く花の生氣ある風姿を見む。

病と死の觀念

○

病んで斃るゝは、枯死するなり。肉體枯れ精神枯れて、人竟に一物をも留むること能はず。故に死の大事實も大事實として痛切に感ずること能はず、否痛切に感ずる氣力なきなり。而して、其肉體の衰へ行くや、必然死に對する用意と覺悟と起らざるを得ず。

之れに反して肉體精神共に熾んなる死刑囚人の如きは、まさに斷頭臺上に

上るに及んで、始めて死を事實として自覺し、驚異と痛苦の爲めに心の平衡を失し、往々にして狂することあり。之れ人は死といふ事實を知りながら、共死する刹那まで、事實としてそを自覺せざるが爲めなり。故に迫り來る死の事實に對して用意と覺悟とを缺き、斷頭臺上始めて死の權威を自覺して狂するなり。（N）

○

健康を矜りとせよ

健康なる人よ、先づその健康を唯一の矜りとせよ。病重きに從つて余は余の健康時を何とも思はずに過せしを悔む。

○

余の氣力は消耗せる乎

綱島梁川は肺を病んで歿せり。高山樗牛も亦然りき。余も同じく肺を病めり。而も梁川、樗牛は瀕死の身を支へて、よく筆を執れりき。死に臨んで、尙ほ筆を執り、言はんと欲する所を言ひ、叫ばんと欲する所を叫ぶ。其勇氣と努力とを思へば、死尙ほ矜りとすべきに非ずや。

顧みて余を思ふ。日々藥餌と親んで空しく病褥に横臥し、碌々として日を過す。余は衷心私かに泣かざるを得ず。余に勇氣なきを爲らざるを得ず。勇氣なき己に泣き、己を罵つて鼓舞し、策勵すと雖も、竟に奮起すること能はざるなり。あゝ余の勇氣は、既に消耗し盡されたる歟。

知らず、樗牛、梁川に勇氣ありて余にこれなきか。或は同じ肺病なるも、樗牛、梁川のそれと余のそれとは、自ら病源を異にせるが故か。

○

病院は小なる宇宙也

病院は牢獄に非らず、一種の小なる宇宙なり。世界なり。人は如何なる所にも宇宙を形造るもの也。

○

病苦と自殺

病苦の餘り竟に自殺す云々の記事は、新聞の雜報に散見する所なり。然れ

ども眞に自殺せざるべからざる程、病苦に惱みたる人にあらずんば、此の自殺者の心理を解すること能はず。

半夜、病苦の頂上に達せる時、濛々たる頭腦の知覺する所唯だ苦痛あるのみ。堪へ難き苦痛を意識する外、他に何物をも意識すること能はざるなり。而して此苦痛や、或時間の經過によつて治まり、又は注射其他の手術に依つて脱るゝことを得、しと云ふ事だに考へ及ばず、身の病院に在るを忘れ、醫師のあるを忘れ、只管苦痛より脱れんと欲する切なる一念は遂に死を希ふに至る。死、死、思ふ所は只死あるのみ。此刹那枕頭若し兇器のあるあらば、自ら殺すに於て何の躊躇かあらん。

余は病臥幾旬、始めて此自殺者の心事を解するを得たり。（N）

○

氣に活きる人

氣に活きる人あり。血に活きる人あり。時に或は骨に活きる人あり。夢に活き得る人あり。

○

肺病に於ける余が發明

肺結核菌は、極めて弱き植物にして、少量の藥液尚ほよく撲滅することを得るも、肺臓に直接藥液を投ずること能はず、漸く血液に混合して、之を逐ふのみ。故に藥液の効は極めて微弱なるものなり。

是に於て思ふ。肺病治癒の途は多量の營養物を攝取して、病菌に抗するあるのみ。詮ずれば、多食は健康を恢復する唯一の道なるなり。余の從來見聞せる所に徴するも多く食ひたる人は、必ず早く全治せり。余を以て妄りに食を貪る者となす勿れ肺病に勝つも負くるも、畢竟は胃の腑の問題のみ。（N）

○

病苦は日課也

或は思ふに病苦は日課なり、異しむに足らじ。這の病苦なくんば余は病人にはあらざるなり。さりながら矢張り苦しき時は泣きたくなる。（五月十日）

病人に最も危きもの

斯くの如くして病を重うせり

○

病人に最も危きはその疾病に倦むことなり。少くとも余は熟々倦き果てたり。（六月十九日）

○

余の健康を損じたるは、獨歩社時代、心身過勞の際に起因す。惡寒を催し、發熱を感じながら、而も余は、日夜事務と編輯と接客との繁劇に忙殺せられて、心身瞬時の慰安を受くることなかりき。

余が肺病の徵候ありしは、三十九年の秋よりなりしも、依然として余は其激勞を續け、獨歩社破綻終結を待ちて、四十年六月より七月にかけて湯ヶ原に遊びぬ。湯ヶ原にては、日々垂釣の業を樂みとせしかど、午後二時頃に至れば、必ず惡寒を感じ、發熱するを常とせり。余は惡寒を感ずるや、釣具を收め、飛んで歸宿し、溫泉に浴して直ちに床に就きしなり。今にして想へば、

余は既に其當時入院して靜養すべき筈の肺病患者たりしなり。而も余は毎日飲酒し、喫煙せり。

病勢頓に增進し、湯ヶ原に止まるの不安を感じて歸京せしは其年七月なりき。在京すること一ヶ月にして、九月に常陸の湊町に行きぬ。されど病勢衰へず、十二月再び歸京す、『竹の木戸』『二老人』の二篇は、大久保の寓居にて稿を起せるものなり。

『竹の木戸』は余の病勢をして一層增進せしめたる作なり。雜誌社に對する言責上、如何にしても筆を執らざるべからず。而も余は其當時、食慾減少し、身體衰弱し、午後は日々發熱して、筆を執りしは漸く午前のみなりき。故に、編輯締切の日に遲れ、雜誌社の督促頗る急を告ぐ。斯くて『竹の木戸』の最後は、徹宵筆を執りたる程なり。漸く脫稿せしは、夜のしらゞゝと明けたる頃にして、余は此原稿を一度讀み返して之を綴り、机の上に置きて、室を開

け放ちぬ。床を展べて縁近く頭を向け、開け放ちたるまゝ頭のみ出して、昨日よりの疲勞の爲めに昏睡したり。それより余が病勢は頓に募りぬ。

南湖院に來りしは今年二月。初めの程は、晴れて穩かなる日は絶えず室外に出でたるも、今は只病床に臥して、徒らに外面の景色に思を馳するのみなり。余が病やゝ怠りて、再び起つの日は何時ぞ。想へば入院以來こゝに六十餘日、あゝこの六十有餘日は、余に取りて短き月日にはあらざりしなり。

○

病臥して最も苦痛を感ずるは、變化ある窓外の景色を眺むること能はざる一事なり。變化なき室、變化なき床の上に横はりて、波の音を聞き、松吹く風の聲を聞き、風の音を聞き、空に啼く雲雀の音を聞きて、網の張られたる窓外の景色に非ざれば、見ること能はざる吾身に念ひ及ぶ時、余はつくゞ〳〵と今の吾身の儚さを感じ、而して窓外の景色に憧るゝの念一層深く止み難き

今の余の願ひ

病院生活と自由の束縛

を覺ゆ。

床に臥して起つこと能はざる病者が、窓外の景色を慕ふこと程、切なる心はあらじ。あゝ、今の余の切なる願ひは變化ある窓外の景色に接し得らるゝその一事なり。これを措いて他に何等の願ひあるなし。

○

病院生活に依つて最も痛切に感ずることは、自由の束縛なり。飲酒喫煙の心ならざるは勿論、坐臥進退すべて病院の規定と、醫員の命令にこれ從はざるべからず。初め元氣なりし時は、此規定と命令とを非常に苦痛と感じたりしも、病愈々重りては、自ら進んで、その規定に服するやうになれり。是れ病症の苦痛より脱れんとする心は、規定制限に服するの苦痛よりも強ければなり。

人は靜かに己を觀ずれば、如何なる所にも安住を得、初め苦痛と感じたり

し所も、次第に習慣となりて、何の苦痛をも感ぜざるに至るべし。余は初め酒を欲し、煙草を欲したり。然も今は傍にて煙草を喫するものあるも、その煙草の香ひを厭ふやうになれり。

○

余は死の自覺を得たり

余は死の自覺を得たり、されど悲しむべきは、そを固く把握することを得ざりき。來り、去る、恰も閃光の如し。

これでは駄目。

眞に死に觸れ得たる人は、その自覺をギツシリ握つて遁さぬやうにせざる可からず。梁川君に飽足らぬ點はそこなり。

神を見る人はあり。されど神を掴み得る人は遂に無けん。悲し〳〵。

○

余は昨夜飜然として悟れり。

疾病は彼岸に達する階段のみ

曰く、生や素より好し、されど死亦惡しからず。疾病は彼岸に到達する階段のみ、順序のみ。又吾生の一有事たりと稽ふれば、別に煩悶するを要せず。

臨終に先だつこと五六日、一朝、愛弟收二君を枕邊に招きて斯くの如く云ふ。獨歩氏果して眞に覺悟せりや否やは窺ひ知るべからずと雖も、爾後多く病苦を訴へざりしは事實にして、常に昏々として眠るが如く、醒むるが如く、心極めて平靜なりしものゝ如し。二十一日の夜半、夫人治子密かに起きて容態を窺ふに、流涕頰を傳うて嗚咽すること久し。夫人怪みて故を問ふ。「急に何んだか悲しくなつて」とのみにて多く云はず、又私かに泣く。蓋し死を距つること二日前なり。

第二　人物觀

所謂尤高の士

○

世には偏狹を矜りて自ら高しとする者あり。嗤ふ可し。眞に高きの士は、糞尿穢濁の間にありても容易に其圭角を現はすものにあらず。菜根譚に謂ゆる尤高の士これなり。

胸中の小埒を撤せよ

○

他人の感情を尊重するは極めて貴ぶ可きことなり。宴會の席などに、俺は酔はぬからとて、他人の興會をナミし、冷笑し、非議し、以て己れ一人高く偉き顔するものあり。小面憎くき哉。他人の意志を重ずるは道、他人の感情

を尊ぶは德なり。辛じて自ら活きんが爲めに、他を顧みる餘裕なき渠等は禍なる哉。藝術の上にも斯る態度を取りて自ら高しとする人あり。憎む可し。共に酔ひ共に歌ふことを得ざるまでも、その胸中の小埒を撤して、他の興味を承認するに勉めよ。

余の最も厭ふは怠け者也

○

余の最も厭ふは怠け者なり。怠慢は不德義なり。善くもあれ惡しくもあれ、ビシ〳〵と片端より明快に片付けゆく人は、第一見ても目醒し。不明瞭なる頭腦を以つて、グヅリ〳〵して居る男は大嫌なり。見物はそのテキハキと進行する段取だけを見ても拍手せずには居じ。

敵は多きを恥ぢず

○

敵は多きを恥ぢず。されど、敵として其人を選め。卑しき敵は持ちたるだけにて此方の敗北なり、恥辱なり。

先づ其一人を仆せ

○

五人と爭はゞ先づ其一人を仆せ、然る後に他の一人、他の一人。斯からば他の二人は戰はずして自ら潰えん。

友人は余の分身也

○

余は多くの友人に愛せらるゝを矜となす。

余に於いて、友人は余の分身なり。他人の中の自分に非らず。

冷頭熱手の德富蘇峰

○

德富蘇峰は余の恩人なるのみならず、又余の深く崇拜せる人なり。その文章の如きは日常愛誦して殆んど暗記するに至れり。

渠は頭冷にして然かも熱手の人なり。苟も事に臨む毎に、その萬能を盡さずんば止まず。何事にも好い加減では置けぬ人なり。底の底を極めて始めて滿足す。渠の新聞の今日あるは、渠の熱手冷頭を遺憾なく現はすものなり。

渠は又部下を心服せしむるの技倆を有す。他なし、部下の技倆を明かに認むるの量あるなり。苟も一方に雄たるの技倆を認むる時は、隨分法外なる買方をなす人なり。

渠は人を相るに確かに鋭き目を有す。渠の容易に人に賣られざる所以なり。余嘗て渠の下にあり、渠の余を評する言を聞きて心甚だ平ならず。愚叟何をか云ふ位に思うて氣にも留めざりしが、今にして考ふれば言々皆肯綮に當りて外るゝ所なし。現に『二十八人集』の序に余の性格を論ぜる邊、靜かに思へば、今の余は一言も無きなり。

渠は常識の人なり。常識の特別に發達せる人なり。されば時に穿違へをなして自ら解せざることあり。自然派の作品に對する見解の如き是れなり。されど、余は寧ろ這の種の常識家を尊重す。無學なる哲學者、無智なる思索家に優ること萬々なればなり。

余は此人に碑文を書かれんことを望む。

昨年本郷座に雲右衛門を聞く。蘇峰と相會す。蘇峰わが爲めに文士の訣を說く。濫作を愼め、と是れなり。喰へなければ原稿料を五圓にも十圓にも上ぼして、そして濫作を愼むやうにせよ、と。余服す。

余に眞實の文、東坡の謂ゆる實錄を書かしめたるは蘇峰なり。

東都幾多の新聞記事中、最も嘘の無きは、國民新聞の東京便りなり。

○

西園寺侯も昔は貧乏なりし。余の知れる頃、毎日晩餐の際、古葡萄酒の瓶を拔き、僅に一杯を傾くるのみ、後は日本酒にて我慢す。葡萄酒の價僅に七圓。侯常に曰く、「あゝ毎日葡萄酒を一本づゝ自由に飲み得る身分になりたい。」と。今にして思へば殆んど隔世の感あり。

侯の酒の長きには閉口せり。毎晩二時三時まで相手をなし、時には夜を徹

貧乏なりし西園寺侯

することすらあり。平常の陶庵侯は極めて溫厚篤實の君子人なれども、耽醉する時の氣焰や當る可からず。

○

花袋は余の親友なり。而して最も力となる人なり。渠と余とは全く性格を異にし、作品の傾向を異にす。而して尙ほ十年遂に親交を斷たざるは何ぞや。他なし、互に他を尊重すればなり。

花袋ある間は、余は安心して死ぬを得。渠は吾が遺族を飢ゑしめ辱かしむることなきを信ずればなり。嘗て日光にありたる日、余渠に語りて曰く、余若し逆境に沈むことあらば、第一に先づ君の助力を仰ぐ可し。余は友人に世話になるを毫末も恥辱とせず如何、と。渠曰く、主張は全く別なり、われは如何なる場合にありても他人の世話になることをせざる可し、われは自ら活く可し、されど君の爲めの助力は吾が辭する所にあらず、と。爾來十幾年、余は

花袋は余の親友なり

臨川は狂熱の人也

だかれて寢て見たき風葉

病牀にありて渠の親切に活く。渠は比較的逆境に人となり、余は昔より坊ッちやま育ちなり。主張の分るゝ所以ならん。

○

臨川は狂熱の人なり。狂熱の工學士！　矛盾も亦太しからずや。渠は眞に泣き得る人の一人なり。眞に悲しみ得る人の一人なり。渠のよく女に惚れらるゝは、この狂熱あるに依る。

臨川の酒は渠が鬱悶不平の安全瓣なり。これ無くんば渠は破裂すべし。

渠は詩人なり。

○

風葉は愛すべきの人なり。渠とならば一所に抱かれて寢て見たき心地す。渠は存外謙虛の人なり。數年前、余落魄して渠に原稿の周旋を乞ふ、『第三者』なりしと覺ゆ。當時の風葉は鏡花と相並んで當代屈指の才人。文人としての位置も亦第二流に落ちざりき。而かも渠余の爲めに斡旋甚だ力め、且つ余を勵まし余を敬ふこと大なりき。文壇に於いては渠先輩なりと雖も、書齋に於いては余その先輩なりき。渠は眞に己を虛しうして他に聞くの人なり。渠の今日ある偶然とは思はれず。

愛すべき未醒

○

未醒も亦愛すべき男なり。世往々渠を策士視するは何故ぞや　渠は放膽の如くして實は極めて細心親切なる男なり。水滸傳中の豪傑の如く見るは甚だ謬れり。余は渠を泣かしむるに妙訣を有す。度々應用せり。卽ち、眞の親切もて語ることなり。

未知數孤雁

○

孤雁は事を託するに足る人なり。周密安心なること孤雁の如きは無けん。唯、何事にも禱らんとする、それには與みせじ。

渠の文章小説は未成品なり。必ず他日大成するの時ある可し。些末の才氣なきが嬉し。

○

打算に明かなる人

餘りに打算に明かなる頭腦を有する人の末路は憫むべし。○○の如き然り。渠は知なるが故に人を容れず、敏なるが故に人を侯たず、慢なるが故に人に背かる。憫む可き哉。

○

空想に活くる蘆花

蘆花は空想實行家なり。渠は空想に活きて空想に死するを得る貴き性格を有す。生れながらの詩人なり。

世、渠を目するにトルストイの後塵を拜して、盲起盲動する者となす。謬れりとも謬れり。その偶々杜翁に趨けるは同主義に走れる杜翁の動機に同意せるのみ。決して同主義に贊成せる爲めには非らざるべきを信ず。渠は杜翁なくも今の新生涯に入らでは已まぬ人なり。

渠の事業は幾度か仆れ躓かん。されど、その着手既に効果なり。

○

秋骨は感じよき人也

秋骨は感じ好き人なり。藤村の嘗て、「氣分の惡しき時、秋骨と談話すれば、その苦、頓に癒さる」と云ひしは無理ならず。

○

灘を越した酒の如き人

田村江東は余の熟友なり。今は愛好すべき樂天家なれども、その以前は極めて尊敬すべき、眞摯なる信仰家なりき。

渠の今を見て、暢氣なる、洒落なる、面白いオヂサンと思ふ者あらば、われ與せず。

渠は灘を越したる酒の如き人なり。

○

其三分を殘せ

人を責めんとせばその七分を責めて三分を殘せ。包圍攻擊は却つて反噬せらるゝに終らんのみ。青果の世に惡解せらるる、此の所以なり。

放縱に倦める紳士弔花

弔花は氣の弱き親切なる男なり。文章好くこれを現はす。今少し惡徒がるの量あらば、渠の藝術は頓に進まん。

渠往年の放縱に倦みて、近來頗る眞面目にして責任ある紳士となれり。甚だ善し。

余は弔花及び弔花夫人の親切を想ふ毎に、未だ泣かざることなし。

○

瓊音に嘘なし

瓊音の作家として立たざる所以をわれ解せず。渠は好箇の短篇作家ならずや。『二十八人集』中その『月給十五圓』の如きは慥に傑作たるを信ず、渠の文章には嘘なし。

○

かくれたる君子

杉田恭助は好箇の紳士なり。余甚だ負ふ所多し。渠は余と親交あるに非ず。その湊町以來余の爲めに盡したる恩誼は、決して忘る可からず、而かも一言恩を賣るの態なく、默々焉として常にわが爲めに力を竭さる。かくれたる君子なり。後に傳へざる可からず。

水戸の人、煙草商、小杉未醒の親友なり。

○

中幕役者として終るべき人

世には終生中幕役者として終る者あり。友人○○の如し。その才智、その識量、その度胸、その勇氣、その何れの一つを以てしても優に爲すあるの材なりと雖も、惜しむらくは、唯渠に仕事の連絡なし。箇の事、箇の事、孤峰的に秀でゝ、その間何の脈絡を見ず。昨日は文士、今日は事業家、政事家にもなれば商估ともなる。傍より見れば甚だ快心事らしけれど、當人の爲めには極めて損失なり。

退一歩の工夫

粗笨は悪徳也

余の最も早き愛讀者

全く別な世界の人

○

余は近來退一歩の工夫をなす。

○

粗笨は悪徳なり。粗笨の人に限りて必ず快心事を求む。事の成る可き筈なし。敗るゝを見得とする東洋流の豪傑は、余與みせじ。

○

小山内薫は余の最も舊き愛讀者なり。余の名未だ聞えず、余と相見ざるの頃より、吾が作品とあれば斷片零墨も尙ほ採集して耽讀す。獨歩集を容易に集め得たるは同君のおかげなり。

○

漱石とは未だ相見ざるも、その態度の重々しきには敬服し居れり。然し決して利害打算を知らぬ人には非ざる可し。つまり利口なる人と思ふ。門下の

余に妹あらば

滿谷國四

作品に時々折紙を付けるのはイヤなり。

近頃その近時小説觀を讀む。泣けざる小説の多きを惜しむものゝ如し。然しこれ全然根柢が違ふのなり。余等は這の人生に驚き異み恐れこそすれ、泣かんとはせじ。又眞に一度も泣きたることなし。或は泣き、或は笑ふ、さまで自己を人生の圏外に外して冷かなる能はず。然らずや。

小説に泣くは快し、されど今の世は泣く以上に恐し、畏し。

風葉が嘗て漱石を評して、全く別な世界の人と云ひたるは、誠に吾意を得たり。

○

天絃は良き人なり。余に妹あらば呉れだきものなり。

○

滿谷國四郎は長者なり。年齢余より若きこと數歳なるも、思想は遙かに吾

郎は長者也

が兄なり。余は幾度氏によつて導かれたるかを知らず。

梁川に惜む所

○

梁川は神を見たり。余はそを信ず。唯その實驗を長く把握し得ざりしを惜しむ。

偽惡者と偽善者

○

偽惡者は憎む可し。偽善者は憫む可し。

世間に損な人と得な人

○

世間に損な人と得な人とあり。得な人となるは不快なり。損な人となるも亦不快なり。

余が行爲の標準

○

余に道德なし。自ら羞ぢると羞ぢざるとを以てその行爲の標準となす。

○

あてにならぬ人物月旦

世に人物月旦ほどあてにならぬものはなし。偶々その一角面を見て、全般を推さんとす。一度生きる死ぬるの戀をせりとて、終生戀する男の如く余を云ふ者あり。呆れざるを得ず。余は何も戀を職業とはせざるなり。

苗字ッて印形の名か

○

余の港町にある頃、土地の網主に通稱ハリボウなるものあり、余は屢々語れり。

渠、本名を知らず。一日これを問ふ、渠解せざるもの〻如し。暫くして曰く、あゝ、苗字ッて印形の名か、と。渠好く飲む、飲みて唄ふ。余はハリボウを愛す。

余の尊敬する二葉亭

○

二葉亭は余の尊敬する人なり。作品人物は云はずともあれ、その終始革命的思想の鬱積せる點を喜ぶ。

始終日記帳を新しくする人

眉山の死は藝術難也

○

自己の生涯に常に時期を劃せんとして心を痛むる人あり。元旦に、月初に、始終日記帳を新しくして、吾が生今日に初まると叫ぶ。

○

眉山の死は藝術難なり。渠は生活難に死するほどの臆病者ならず。

戀愛に定義なし

死する今にも戀あり

戀は小兒の火弄り也

第三　戀愛觀

○

戀愛に定義なし、たゞ様式あるのみ。

○

死の前に戀なしと思ふは愚なり。余は想ふ、今死する今にも人は常に新しき戀をなすを得るものなり。

○

戀は遊戯なり。遊戯中にも危險なる遊戯あり、小兒の火弄りの如し、戀は小兒の火弄りなり。

心は夢の如き戀を欲す

○

余は口に嗤ふも、心は尙ほ夢の如き戀を欲す。物語にならぬやうな戀はイヤなり。

戀は何遍でもして見る氣也

○

戀なら何遍でもして見る氣なり。戀の色のと騷ぐ年でもあるまいとは餘程なおせつかいなる哉。余だけは今申上げる如く、何遍でもして見る氣なり。

戀の事實は苦し

○

戀は追憶して樂し、翹望して樂し。されど事實は苦し、悲し。

戀の經驗は甘し

○

火傷せる者は火を恐る。一度戀に敗れたる者は二度する勇氣なし、と。大嘘なり。戀の經驗は繰返すほど甘く且つ樂しかるべし。

○

尤も痛切なる戀物語

若き戀する人に告ぐ

余は近頃尤も痛切なる戀を聞けり。そはこの院内患者に起れる果敢なき戀物語なり。男は熱發性の重症、女は咯血性の患者なり。渠等二人は院醫看護婦その他の嚴重なる監督の目を偷み、病氣を恐れつゝ相接し相馴れたり。然るに兩方とも其症狀進み、女は盛に咯血し、男は不斷の熱に苦しむ。しかも女の咯血せりと聞くや男は狂氣の如く駈付けて看護に從ふ。便器の始末まで他の手を藉りることとなし、女は唯その嗜みを恥ぢて病牀に泣くのみ。共に若き男女なり。

○

若き戀する人に告ぐ。戀の苦痛は多くその不安動搖より來る。その苦痛より脱せんとせば先づその不安動搖を避くる手段を講ぜよ。容易に避け得らるる道なり。

○

背きたる女を追ふ勿れ

一度背きたる女を追ふことなかれ。

女と爭ふ場合來らば、寧ろ潔くあやまれ。

戀する時、手綱は短きに限る。

女の前に泣く勿れ、常に笑ふべし。

女は往々にして泣く眞似をなすことあり。一度も笑ふ眞似はなさず。

女はより多く撫でられんより寧ろより多く打たれんことを望む場合多し。

執拗を以て女を責むることなかれ。今の女は從順過ぐるに苦しむ。

女は禽獸なり、人間の眞似をして活く。女を人類に分類せるは舊き動物學者の謬見なり。

戀は一種の遊戯のみ

○

戀は竟に一種の遊戯たるに過ぎず、兩個の異性が互に相愛するに非ずして、相弄ばんとすればなり。

戀を失ひて初めて人間の胸底に潜める最も强く、最も鋭く、又最も猛烈にして凄まじき戀の眞の力に觸るゝことを得るなり。戀の滿足は所詮平凡なる滿足にして、詩となり得るものにあらず。一種の遊戯に過ぎざる戀も、一たび失はれて、初めて無限の光輝を發す。古來失戀の痛苦に泣かざる大なる藝術家は殆ど罕なり。

男性は總て理想的にして、女性は總て實際的現實的なり。故に男子は、其戀の現實に滿足すること能はず、進んで更に强く鋭き力に觸れんとし、其結果を豫想して時に戀人の死を願ふことあり。是れ理想せる戀に到達せんと欲する男子の努力なり。斯くの如き戀は女性の人格其物に向つて放射する戀にあらず。所詮は戀を戀するものなり。

女性は實際的現實的なり、直に現實の戀其物に熱して、極度の心熱を注ぎ、永く現實に止まることを欲して、現實以上の戀に觸るゝことを知らず。男子

にありては實在の戀その物に對して一種の空零を感じ、戀せる戀を實現せんと欲する情の一層切なるを覺ゆ。男子の戀は動的にして長く現狀に止まること能はず、現實以上、何等か高き戀の或物を理想し憧憬して進まんと欲す。女性の戀は靜的にして、唯現在の戀に滿足し、現在の戀に誠實なる心熱を濺いで、長く現在の戀に止まらんと欲す。故に女性は現在の戀に向つて全力を傾倒することを得れども、男性は實在以上の戀をなすが故に、實在の戀に向つて全力を注ぐを得ず。玆に於て男女の戀は其根本に於いて、相異る。失戀せざれば眞の戀に觸るゝこと能はずと云ふは此處なり。若し戀の理想を有し戀を戀する女性ありとせば、其處に初めて熱烈火の如く、何物をも燒き盡す底の戀は成立するなり。

或る意味に於いて、藝娼妓などの卑しき女性が、却つて戀の理想を構成し戀を戀するものなり。藝娼妓は、淨瑠璃又は俗謠などに示されたる戀の典型に依つて一種戀の理想が形成せられあるなり。故に彼等の戀たるや、處女の戀に比して遙に熾烈に、如何なる事情をも排して、唯だ一路戀に向つて進まんと努力す。その强烈なる戀の火に身心を燒くことを得るは是れが爲めのみ。情死は戀の極致にして、而も藝娼妓に情死多きは、彼等の頭に戀の理想が構成せられ、戀を戀するの心あればなり。（N）

○

某學士に於ける某女の心中沙汰、われその所因を解せず。要するに女は女なり。如何に新時代に誤まられたる女性なりとて戀愛に時代ある筈なし。何故に渠はその性（セックス）の權威を以つて渠女に向はざりしぞ。

○

總（すべて）ゆる女はその汚なき夢を覆はんが爲めに美しき戀物語を喜ぶ。渠は自らの汚穢に堪へざるなり。

要するに女は女也

汚なき夢を覆はん爲め

余は確に詩人かぶれせり

裸體の寫眞をつきつけられた心地

○

心中は美し、又詩なりと見たる時代余にもあり。然れども、ここに男女あり、各別々の考へ別々の目論見を以つて、一緒に死するなりと思はゞ如何に。

余の『第三者』の如きは慥にその結果に於て失敗せり。渠等は心中すべき男女にあらず。一面に醒めて一面に美を欲する小さき吾が心は、渠等をして斯る無理なる、馬鹿々々しき死態を選ばせたり。

余は確かに詩人かぶれせり。

○

女にて余の小説を解し、余の小説に耽讀する者甚だ尠なしと云ふ。難有いこと哉、余も亦そを欲せず。渠等にして余の小説を讀まば、夜會服に盛裝せる渠等の前に、恐らく裸體の寫眞を突付けられたる心地やせん。これ吾が妻なりと言ひ得るに苦しむ可し。

戀なき男女は種痘せざる人の如し

戀の議論は決する時なし

自尊心を傷けざる戀なし

女は自分の弱點を他に攫ま

○

戀せざる男女は種痘せざる人の如し。何時如何なる處にてその病素に中らんも知れず、危し。されどその免疫期間は極めて短し、或は全く無き人あり。

○

戀の議論は必ず決するの時なし。何んとなれば、渠等はその問題を決せんとするよりも、その樣式を說かんとすればなり。

○

失戀に苦しきはその自尊心の毀損なり。自尊心を傷けざる戀は天下にその例を聞かず。

○

戀を鬪なりと云ふ者あり。或は云ふを得べし。さる人にありては、自ら損失する事少くして對者の弱點をより多く攫まんとするに依る。さりながら、

せることなし

客を欺く賣婦なし

女には唯一の武器あり

ユーゴーに倣はゞ

女はさう容易に自分の弱點を他に摑ませる動物にあらず。渠は顏面以上の負擔なしには支拂をなさず。斯る場合の男は敗るゝこと必せり。

○

これを他に聞く。今の世、賣婦にして客を欺くものなく、多くは客の爲めに欺かるゝ賣婦多しと。然もあらん。

○

女には唯一の利器あり。渠の變心を責め、渠の不德を責むる時、渠最後に曰く、だつて私は何んでも無いのに、貴方が色々云ふものだから、と。無論別れ話の時なり。

○

ユーゴーに倣はゞ、余は戀人を愛す、されど女を憎む。

○

戀は多くオプラアト也

戀と人間の思想

人の棲む所戀あり

戀の涙は苦からず

ノロケ程

人生を飾ると云ふより、戀は人生を緩和し、調節するなり。戀なき世を想へ、余は想像してだに寒心に堪へず。戀は多く人生の苦みを包むオプラアトなり。

○

戀は人間の思想を廓大視せしむ。

○

土あるところ必ず草あり、人の棲むところ必ず戀あり。

○

戀の物語は當人に取りて最大の快樂なり、慰藉なり。例令その戀やぶるともその物語は怡し。得るも失ふも戀の涙は苦からず。

○

余は他のノロケを聞くことを好む。ノロケほど邪念なきはなし、渠はその

邪念なきはなし

物語を美化せんとこそ思へ、決して善化せんとはせじ。

○

風葉に戀ありしや

戀を描くこと最も多き風葉に果して戀ありしや。余は風葉の顏を見る毎に常にそを思ふ。

○

花袋には花袋の戀あり

花袋の『蒲團』を讀みて、主人公の徒らに意氣地なきを嗤ふ評家あり。余は與みせじ。人は一樣にあらず、花袋には花袋の戀を是認せざる可からず。花袋ほど自尊心强き人は無し。反省心强き人はなし。渠は終りまで自分一人に活きんとする人なり。渠の人格、渠の道德、皆それに起因す。貴む可からずや。その花袋の描ける戀なり、斯くの如くあるは素より當然のことのみ。自己の弱點を示さずしてそこに戀のあるなし。

○

戀なくして已み難き事あり

人は自らを自然と同化同融せざれば已まざらんとす。場合により處により、人は何うしてもそこに戀なくして已み難きことあり。

○

戀せる以上は可能性あり

如何なる戀も、戀せる以上は必ず可能性(ポッシビリティ)あり。人は全然お話にもならぬ程の戀をする者にあらず。

○

虛僞を誠と信じて相愛する也

吾れを僞り、吾れを誇大して、吾が人格を眞價以上に見せんとする、之れ戀する者の眞の心なり。所詮戀は虛僞なり。虛僞と知りながら、尙ほ其虛僞を誠と信じて相愛する、之れ戀の形なり。

○

吾れを戀する也

戀は、自家の理想を或る對照に投影し、吾れと吾が理想の幻影に欺かれて吾れを戀するなり。戀の醒めたる時、初めて其對照の眞價を見得べし。

思想上の貞操と感情上の貞操

○

男には思想上の貞操あれども、感情上の貞操なし。女には感情上の貞操あれども、思想上の貞操なし。男の其主義思想を變ずるは根本より動かざる可からず、少なくも相當の時日と準備とを要す。之れ思想に對する貞操あればなり。されど、男に於ける好惡の念は容易に豹變す。初め些ッと好きな女も、時によりて嫌ひになることもあるべし。初め毛嫌ひせし女も、後には好きになることもあるべし。之れ感情上の貞操なき所以なり。女は全く之れに反す。其思想は根本より來るものに非ずして、到底附燒刄たるに過ぎず。故に、或る人の言に感動し、或る人の書物に心服すれば、朝の思想は直ちに夕に變ず、之れ思想上の貞操なきなり。然れども女は、フハスト・インプレッションに於て嫌ひだと思ひたる男は、何時まで經ちても嫌ひなり、好きになるは容易のことに非ず。好きだと思ひたる男は何處までも好きなり。縱し、後に其男

近代人の情死

理想なき

の缺點を見るも、決して嫌ひになるものに非ず　新らしき空氣を呼吸し、新らしき教育を受けたる近代女子の感情は、純なる感情に非ずして、幾分の思想を加味す。故に其戀や複雜にして豹變し易し　熱烈なること火の如き眞個の戀は純感情のみに生ける教育なき女に之れを見る。

○

情死は美なりと云ふ。吾れ屢々此の言を耳にす。されど情の極致に至り、死せざるを得ずして死したるものには、吾れ其美を認むるに吝ならざるも、近代人の情死は眞に衷心より情死せざるを得ずして死したる情死少なし。少くも一部の洒落氣と虛飾とを加味す。斯くの如き情死に、何の涙や、何の美か存せん。吾れ之れに向つて唾するも尙ほ慊らざるなり。

○

戀を戀する人にして、初めて悲痛の戀をなすことを得。理想なき戀は遂に

戀は平凡也

平凡なる戀なり。

○

綠、紅、紫

戀は心の大なる革命なり。戀せざる以前の人生は綠なり。戀の色を以て紅とせば、戀せる後の人生は紫なり。

○

尊き糧

失戀は詩人の糧なり。然り、尊き糧なり。

○

痛き戀

甘き戀を吾れは欲せず、苦しき戀を欲す。痛き戀を欲す。

○

淡紅、青色

處女の戀は華やかにして夢の如く、其味淡し。色を以て之れを譬ふれば、淡紅なり。年增の戀は濃厚にして、執拗なり、色に譬ふれば、深き青色なり。

○

奈何なる强き男子も

奈何なる男子も、戀の前には跪かざるべからず。泣かざるべからず。

○

苦き哀愁にあり

戀の歡樂は、甘き樂みにあらずして、苦き哀愁にあり。

○

春の宵の如し

戀する者の心の狀態は、宛然春の宵の如し。夢に非す、現實に非ず、夢と現實との境に彷徨して、其間に一道血潮の流るゝを見る。之れ戀の希望なり、戀の光明なり。

○

肉交なき戀

肉交なき戀は事實に非ずして空想なり。醒めての後は夢の如し。

○

痴態も眞劍也

第三者の目より戀する男女を見れば、一の痴態に過ぎず。されど戀する男女にとりては、其痴態も眞劍なり。眞面目なり。

自然の姿

○

戀は最も自然なる自然の姿を體現したるものなり。

都會の戀に餘裕なし

○

都市は戀するところにあらず。都會の戀には餘裕なし。戀する男女は、都會を去つて須らく山水自然に親しむべし。

趣味の一致にあり

○

戀は容貌の美醜に關せず、趣味の一致にあり。

最も矜ある過去

余が前に萬金を積め

第四　藝術觀

○

余は嘗て其如何なる場合に於いても、不眞面目、不謹愼の著作を爲せしことなし。これ余の有せる總ゆる過去の中に於いて、最も矜ある過去なり。余はこの過去を傷けざらんが爲めには、如何なる犧牲をも惜しむことなかる可し。

○

余が前に萬金を積め、而して藝術の名に據りて之を斥くることを命ぜよ。余は言下に唾棄すべし、粉碎すべし、蹂躙すべし。而して終に悔恨すること

なかる可し。

○

余は各種の經驗を有す。大政治家、大記者、大事業家、大感化者、何れも余が嘗て有せりし理想なり。理想を理想として單に憧憬するに滿足し得ざりし余は、其都度必ず指を其一に染めたり、而して何れも見事に失敗せり。難有かりし失敗よ。余にして若し此失敗の恩寵なかりせば、凡下拙劣の徒と爲り了つて終に充すを得ざる空想に驅使せられて徒らに困憊せんのみ。余は文人としての外、遂に活き得ざる人なり。此自覺は迫か後に來りたるものなれども、然かも最も貴重なる自覺なり。これあるによりて、私心初めて救はるゝを得たり。

余は各種の經驗を有す

○

余が雅號

余の雅號獨步は、別に據るところあるにあらず。嘗て『國民之友』誌上に

詩を掲げたる時、その題名を獨步吟と置けり。多くは郊外逍遙の際に得たるものなればなり。後『武藏野』を公にするに當り、其緣に因みて、臨機、署名を獨步吟客とせしかば、これより社中の人々余を呼ぶに獨步君を以てせしより起る。余が雅號の由來は斯くの如きものなり。

の由來

○

他を思ふ暇なし

余は自作の世評に上らざるを以て嘗て一度も煩悶せしことなく、又上ぼせんと勉めしことも無かりき。余は眞實と認めたることを正直に描きたるに滿足して、他を思ふ暇すら有せざりしなり。

然れども余が作品の買手なきには閉口せり。何れの書肆も余の作品を掲ぐるに餘程迷惑せるらしく、或書肆の如きは菓子折を添へて原稿を返し來れり。當時幸に友人の周旋にて何うやら斯うやら賣れたるものゝ聊か心細からざるを得ざりき。

余は正直に告白す

○

君が作品の世評に上らざるや久し。君は斯くして當時世に評判好き作品を見て如何なる感を有せる。さぞ煩悶苦惱することなる可しとは余が數々受くるところの問なりき。然れども、余は正直に告白す。余はその爲めに未だ嘗て一度だに煩悶せしこと無かりしを。余は唯だ無頓着に斯くの如きものならんと諦め居たりしなり。評判無ければ爲方なしとのみにて、評判好き日の來るべきを待設けむともせざりしなり。

嘘を書かぬ事

○

當時余の創作に對する意見は唯一つありき。即ち嘘を書かぬことなり。余は總ゆる罪惡の中にて最も嘘を憎む。些末の嘘ありても余は直に其作品を却けたり。ウオヅオルスの感化も有りしならん。余は心に眞實と認めたる事を正直に書くを唯一の家法とせり。如何に巧妙なる製作品と雖も拵へ物は遂に虚僞なり。余は如何に窮迫しても嘘を書くに忍びざりき。

名乘るなら自然主義也

○

人多く余の作品を自然派の下に分類す。固より辭せず。されど余は自然派たることを自ら意識して書ける作品は一つも無し。余の性格としてはあれ以上、否あれ以外のものは書けざりしなり。されば自らの作品を時代に進みたりとも超越せりとも思ひたること無し。心に適せる作品をなせりと云ふ方一番眞に近かる可し。

然れども、自然主義者の作物は、自然主義者以外の作物に較べて迥に面白し。どうせ名乘らねばならぬものとすれば、余は自然主義者を以て居らんと思ふ。

余は技巧

○

人較もすれば文章の無技巧、無脚色を云ふ。大體の意味に於いて異議なし

派を以て居らん

と雖も、或點に於いては全然反對の意見なきを得ず。技巧なる文字にして、單に要なき潤色修飾に止らば則ち已む。若し夫れ、畫家の或色彩を調色板に苦しむ如き苦心を含むものとせば、余は寧ろ技巧派を以て居らん。

余は思ふ、描かる可き色は、其場合に唯一つの外なかる可し。畫家にしても曙の雲を描くに、二或は三の色彩に心迷ふことありとせんか、そは疑も無く、一つを殘せる他の色彩は悉く虛僞なり。眞の色は一刷毛も加ふ可からず、一刷毛も減ず可からざる極所に存す。數色の一に迷ふ如き愚は斥く可きも、その一色を出さんとして苦しむ畫家の苦心は大に貴む可きものならずや。

余は此意味に於いて技巧派たらんことを庶幾す。余は常に如何にせば眞の色彩を得んかを思ひ煩ひて、殆んど瘦骨の苦を辭せざりき。他の見るところは知らず、余は自己の文章に於いて自ら一點一字も增減し得ざる迄の推敲を敢てせり。余は常に文章に全力を盡くせり。

蘇峰我が文を見るの明あり

水滸傳と竹取物語

○

蘇峰氏嘗て余を評して曰く、獨歩は文字に貧しき人なり。されどその貧しき文字を巧に按排し、調節し、布置して、一字增減し難き文章を草する苦心は、他の企て及ばざる長所なりと。余私かに謂へらく、蘇峰吾文を見るの明ありと。

○

余は『水滸傳』を愛讀す。『水滸傳』は單に東洋の五大奇書の隨一たるのみならず、亦世界千古を通じて最良最善の書たるを失はず。後編天子に會して以後の文は蛇足なるべけれど、百八の豪傑を百八に書分け、箇々の箇性を躍動せしめたる大手腕に至りては、只管驚嘆するの外なし。特に豹子頭林冲の如き、悲劇的人物として彼の如く巧に描かれたる書は、天下に比類少かる可し。沙翁の天才を以てするも、あれ以上に出づるものありや疑はし。馬琴の『八犬傳』の

如きは、之に比して其差豈天壌のみならんや。

『竹取物語』は、わが國の物語中尤も秀でたるものなり。日本文學の精華として長く後代に傳ふべきものならん。唯惜むらくは、彼の構想或は支那の物語などに胚胎せしならんかを。

○

常に己を師とするの文

英文學の感化を受けたる人の文章には一種の典型あるものの如し。曰く某の文、曰く某の文、曰く某の文、皆然らざるはなし。思想の堅實、見解の妥當はこれあらんも、文章として余は好まず。句法冗漫にして他を訓ふる如き態度あるを忌む。常に己を師とするの文章なり。

○

余はツルゲネーフに飽けり

ツルゲネーフは曠古の大作家なり。其作品は余の最も愛讀せる者の一なり。或時代には、殆んどその手法にさへ私淑せることありき。されど今日の心を忌憚なく云へば、余は最早ツルゲネーフに飽けり。その富贍なる文字、音樂的諸調、哀愁的情操に於ては、優に時代に卓越するものありと雖も、不感服なるは其餘りに隱者めける點なり。活潑々地の人生の渦中に投ずるを恐れて、獨り自らを潔白にせんとせる點なり。余は思ふ、人生とはツルゲネーフの云ふが如き靜和隱寂のものにあらずして、更に複雜、更に活動せるものなりと。平たく言へば、渠の小說は餘りに貴族的、餘りに詩人的ならずや。

ツルゲネーフは人生の圈中より一歩を踏出して思索的に人生の眞相を判斷せるの人ならざりしか。余の疑なり。

○

余は讀書子に非ず

余は元來讀書子に非ず、極めて無精者なり。殊に近來は機根薄く幾んど讀書に親しむことなし。花袋君の如き常に余を導きて、讀書の趣味を涵養せしめんと勉めたれども、余は何時もその意見に從はざりき。

涉獵家として比儔を絶つ

破天荒なる支那の怪談

○

花袋君は篤學の士なり。詩人としてより、寧ろ鑑賞家、學者として世に立つ可き人なりしならん。露伴君の和漢學に於ける、花袋君の大陸文學に於ける、涉獵家として天下恐らくは儔なからん歟。

○

『聊齋史異』は余の愛讀書の一なり、余は自ら怪むまでに怪異譚を好み、これを聞きこれを讀みては殆ど夜を徹するを恨まず、特に支那の怪談に至りては、其思想の奇拔にして破天荒なる到底わが國人の及ぶ所にあらず。『聊齋史異』はその文字の豐富新鮮なる點に於ても亦他に卓絶す。

怪異譚は、民族空想心を最極度まで發揮せるものなり。又滑稽心を最極度まで發揮せるものなり。鬼神怪異を語らざる民族は、實相に役々として些の餘裕をも有せざる民族なり。

議論の濫作は忍ぶ可からず

一口にお芝居と云ふ

イブセンは食はず嫌ひ

○

小說の濫作は尙ほ忍ぶ可し。議論の濫作は余の到底忍び得ざる所なり。

○

余は芝居を好む、されど脚本は嫌ひなり。何と云ふ譯は無けれど、一口にお芝居と云ふ語に虛僞の意味を含めるやうに感ず。又脚本なる者の形を見るも、名前を上に書いて言葉をその下に續けたる、實に不愉快なり。讀む氣になれず。

○

イブセンは大作家なりと聞けど、余は嫌ひなり。或は食はず嫌ひなるやも知れねど、出る人物も、出る人物も、與へられたる文句のみサツサと云つて、我が職分足れりと云ふ顏付きして、樂屋へ歸り、ケロリ樂團扇をして居るかと思へば厭なり。それにあの窮屈なる理窟も面白からず。

芝居は傀儡の進歩也

○

芝居は傀儡の進歩せるものなり、その歴史より推すも到底舞臺に活きたる人物を見んこと、無理なり。

象徴に何の面白味ありや

○

象徴派と云ふものも余は好まず。運命や死や希望やを灰色服の僧や太陽にて表はして何が面白かる可き、根柢が既に嘘ならずや、虚偽の上に築かるものに何の權威かあらん。象徴派など云ふもの、思ふに、凝つては思案に能はぬ口なる可し。人は眞面目に見、眞面目に聞きたる事を、正直に書いて居れば好きにあらずや。

余の文の外國文に譯さるゝ時

○

余、女を描き、然かもその髪、その帶の微細を說かず。余とても描かんと思へば多少は描き得るなり。又場所を書きても、或町の或處とのみにて委細を盡さず　所存あつての事なり。馬鹿々々しと笑ふ勿れ。余は他日余の文の外國文に飜譯せらるゝ時、徒らに飜譯者を煩殺するのみにて何等の印象を讀者に與へざるを恐るればなり。何町の露路に何々ありと細叙しては外國人に解されまじと思へばなり。

されば唯人間を描き、事件を描く。要なきことは總て除けり。會話に通語を避けたるも、一つは其爲めなり。

六七分に止め置く

○

景色を描くにも、十二分に會得せるものを六七分に止め置くを上乘とす。十二分を十分とし九分とすれば、却つて印象薄きものなり。初めの間は十を十分にも十二分にも描きたくて耐らぬものなり。

三氏の繪

○

滿谷國四郎の繪畫は、恐らく今を以て轉歩するならん。余は渠ならずして

描き得ざるの畫題あるを知る。

青木某の繪畫、人その幽玄神祕を讃ゆ。譯が解らず。余には正直、畫面以上のものを感得する能はず。

和田三造の繪畫を見れば、必ず正宗白鳥を聯想す。位置の似たる爲めにや、はた又傾向の似たる爲めにや。

趣向は寢かし置く可し

○

凡そ小說の趣向は長く頭に寢かしたほど好し。面白き趣向を得たりとて直ちに筆を執るは惡るし。先づ或主人公を得たりとせよ。然る時は、その主人公を横より縱より表裏種々の方面より見よ。而して、斯る場合には斯くする人、斯る時は斯く動く人と、自ら描かんとする趣向以外の趣向を樣々に立てて其人を研究せよ。然る時はその人必ず立體的に作品に現はるべし。余は趣向以外の趣向を三四種先づ立てゝ置くなり。

言葉を短くせよ

○

文章の要訣は何ぞ。言葉を短くせよ、言葉を簡略にせよ、言葉を平易にせよ、これだけにも盡せば盡きるなり。

余が得意の作

○

『渚』は余に於てやゝ得意の作なり。一日も早く完成して、一部瀟洒たる本を作らん。百頁にても好し、八十頁にても好し。

余の小說を書きだす前

○

余は小說を書き出す前に必ず神經興奮す。心焦り氣怒りて、總ゆるもの癇癪の種なり。斯くの如きこと略々五六日に亙る。されば家人等は余の創作時を恐れて、なるたけ觸らぬやうにして置くらし。

唯眞なるのみ

○

余の小說は唯眞なるのみ。他に何かあらんや。

二葉亭は文壇の恩人也

○

二葉亭は吾文壇の恩人なり。渠に啓發せられたる作家少なからず、否、總て或は殆んど〻云ふ言葉を用ゐ得べし。余もその一人なり。

渠人露西亞に行き、吾は湘南に病む。終生未見の人となり了るやも知れず。

未醒と芋錢

○

未醒の畫に山氣あり、覇氣あり、芋錢の畫に野氣あり、飄氣あり。

花袋の自然主義

○

花袋の自然主義傾向は今日にあらずして、『重右衛門の最後』に初まる。余は作家としての以上に學者としての渠を尊敬せざる可からず。

余は空想の實行家也

○

余は惟ふ、余が性格及び余が過去の閲歴は、余に詩人若しくは宗教家たれ、と宣言すべき約束を有せりと。

余は空想家にして、又空想の實行家なり。日夜空想を夢みて、其空想を實行せんと欲せり。而もそれを實行すべく余は餘りに現實に對して執着の心薄し。之れ余が奈何なる事業にも成功せざりし根本原因なり。

現實に執着の心薄きは、余に絶えず脱俗的觀念あるが故なり。大自然に對して、吾が生の荒凉と微弱とを痛切に感ずる時、余は此煩雜の世を遯れて物累なきの境地に入らんことを希ふ。而も此遯世の感や水の如く充實し來り、忽ち又水の如く流れ去る。あゝ生に對する哀痛の念今一層深く、鋭く、長く連續するあらば、余は既に世を遁れ去りしならむ。曷ぞ亦塵俗の間に伍せんや。

現世に執着すべく、余は餘りに脱俗せり。而も俗世を遯るべく、余は只管に生の孤獨を嘆ずること能はず。彼の『牛肉と馬鈴薯』に於いて、妻を姦せしめ、子を喰はしめてまでも、尚ほ求めんと欲したる願望、即ち一切の虚僞と夢魔とを振ひ落し、眞實、衷心より宇宙人生の祕義に驚嘆せんと欲するの

念は、余が一貫したる願望なり。（N）

○

「人あり、余の作品を評して、時代に先んじたるものと爲す。されど、余の作品の思想は、決して時代に先んじたるものに非ず、しかも、亦遲れたるにも非ざるなり。

余は虚僞を憎む。飽くまでも虚僞を憎む。あらゆる虚僞を脫離して、直ちに眞其物の本體を捉へ、其眞を眞として描きたるもの、是れ余の作品なり。

余は虚僞を憎むこと仇敵の如く、虚僞を呪ふこと惡魔の如し。これを余が『惡魔』に聞け、將た『第三者』に聞け、何れか虚僞を憎み、虚僞を呪ひたるの聲ならざる。人は虚僞を虚僞として、其虚僞なる生活に甘んじ、遂には虚僞其物を以て直に吾人の眞なる生活となすに至れり。余は心身の痲痺して虚僞を虚僞と感ぜざる人々を憫む。余は彼等の虚僞なる生活に對して覺醒を與へ

余は飽くまで虚僞を憎む

眞を求むるの準備、眞を願ふの念、眞に憧るゝ切なる情を與ふれば、余の望み足る。若し夫れ彼等に對して信仰を與へ、眞實を與へ、救ひを與ふるは別に其人在り。余は其器に非ず。（N）

○

『女難』にモデルなし。若しありとすれば、余自身卽ちモデルなり。然れども余は『女難』に描けるが如き事實を實驗せるにはあらず。『女難』の一篇は、余を根據として、余の聯想を描きたるものに止まる。

少時、余は極めて腕白にして亂暴なりき。しかも、能く人に愛せられたり、校長其他の敎師皆余を慈愛し、交友將た總て余を敬愛したり。今にして考ふれば、其當時の余は、腕白なりしと雖も、全然亂暴なる少年にはあらず、善良なる素質を有し、何處にか秀拔の氣を具へたりきと覺ゆ。

見も知らぬ菓子屋の細君に愛せられ、余の將來に多大の望を囑せられたる

『女難』の由來

ことあり。斯くの如き話柄は、余の少年時代に饒かなりき。

或時、余が地方の國學者として知られたる八十幾歳の老翁、余の人相を卜して此の子他日必ず成す所あらん。されど悲しむべし、女難の相ありと。余は此老翁の預言を、如何にしても忘るること能はず、聯想より聯想を生んで、構成したるもの、例の『女難』一篇なり。(N)

○

余は文章の形式に腐心せず

余は未だ文章の形式に就いて腐心せしことあらず。作品の形は余の問ふ所に非ざればなり。唯、如何にして余が胸に充實せる思想を遺憾なく發揮せしむべきかと云ふ、其一事に腐心して止まず。故に彼の『第三者』の如く又『都の友へB生より』の如く、書牘體を以てしたるもあり、又『牛肉と馬鈴薯』の如く半ば演說體を以てしたるもあり。又『惡魔』の如く、隨筆體と小說體とを混じたる如きもあり。又『酒中日記』の如く、全然日記體を以てしたるもあり。形式の上に於ける作品の好惡は、余の關する所に非ず。余の願ひは、唯、余が眞實の聲を傳ふるに在るのみ。

○

余と日本の小說

余は小說を讀むことに興味を有せず。親しき友人の作品にても繙讀せしこと稀なり。假令、讀み試むることありとも半途にて中止するを例とす。余が興趣を惹くこと能はざればなり。往時余は或る必要に迫られて、紅葉の『金色夜叉』の前半と、『多情多恨』とを讀みしことありき。余は日本の小說にて、比較的露伴の作品を好みたれど、それとて僅かに二三種を讀みたるに過ぎず。他の作者の手に成れるものは、幾んど讀まずと云ふも可なり。余は日本の小說にて些の感化を受けたることなかりき。

外國の作物にて余が耽讀せしは、露のツルゲネーフ、トルストイ、佛のユーゴー、モーパツサン等のなり。しかも余が思想上の感化は、英のカアライ

ル、ウオヅオース等より、作品上の感化は、ツルゲネーフ、トルストイ、モーパツサン等より享受せり。

○

文藝に師弟なし

文藝に師弟と云ふものゝ要なし。讀んで自己の胸臆に觸れたる作品は、總て皆これ師なり。文藝の師は一人に求めず、廣きに求むべきなり。一人を師とすることはよくし得ざる所なり。

且つ文藝の道は、よく教へて教へらるべきものに非ず、自己の力に依つて開發すべきものなり、教へて導くことを得と信ずる者は、未だ文藝の眞意を解せざる輩なり。此意味に於て尾崎紅葉は、竟に眞の文藝を解せずして死せり。或一個の人を選びて、之れに師事するは、文藝の道を學ぶに非ずして、其人格の感化を受けむとてなり。

○

鼻唄を歌つて書く位の餘裕

創作の筆を執つて、先づ好き作品を獲んと欲す。かくては、自己の眞なる情を矯めて、人の胸を打つこと能はざるべし。いかに拙くも、眞に自己の感じたるまゝの誠の思想を僞らず飾らず直截に書き得る人にして、始めて讀者の胸底に迫る誠の文藝を作ることを得べし。好く描かんと欲するは決して好き作品を得る所以に非ざるなり。

創作に對しては必ず眞面目なるを要すれど、おのづから亦餘裕なからざるべからず。筆を執つて堅くなるは不可なり。鼻唄を歌ひながら書く位の餘裕あるを要す。初めより好き作品を得んとすれば、或型に囚はれ、筆端必ず窘束して、純なる感情を謳ふ事能はざるべし。作品の好惡は豫め期すべからず。

要は吾が感情を眞率に吐露するに在るのみ。然らば、十篇を製作する間に必ず一篇の眞實なる文藝を得んなり。（N）

文藝と社會と齟齬する所以

○

文藝が社會と相齟齬するは、畢竟世人が文藝の價値を解せざるが故なり。世人は、文藝を以て、直に草双紙膝栗毛など丶同視し、何人にも入り易きものと爲せり。而して明敏なる頭腦と、特殊の技能を要する非凡なる人に非ずんば文藝家たる資格無きことを解せざるなり。之を要するに、文藝を一般的に解するが、抑々文藝と社會と相齟齬する主要の原因たらずんばあらず。文藝は一般人の解する如く、何人にも解され得る程、爾く一般的のものに非ず。凡人の見識を以て、測ること能はざる人生最奥の意義を語り、最も深遠なる哲理を語る。宗教の眞意義が形體を文藝に變じて現はるゝが如きは珍しき事實にあらず。然るに凡人は此文藝の尊き價値を解せずして、濫りに是非の議論をなす。之れ甚しく文藝の神聖を冒瀆するものなり。これを三十一字の和歌に見よ、古今幾萬の犧牲を拂ひて、幾人の人麿、幾人の業平を生みしや。

又十七字の俳句に見よ、生れては死し、死しては生れたる古今幾億の俳人を通じて、幾人の芭蕉、幾人の蕪村を出せしぞ。人間わが胸に響く眞の感情を其まゝ最も直截に現はして文藝となし得るもの、幾億人中眞に幾人かある。古今を通じて幾億人の犧牲を拂ひて漸く生るゝ此尊き文藝に對して、文藝を語るの資格なき一知半解の徒輩より是非の議論を聞くばかり、絶大の汚辱を感ずる事非ざるなり。(N)

○

ユーモアを除きて主觀の嚴肅なし

主觀の嚴肅と云ひ、冷靜の態度と云ふ。然も、ユーモアを除きて主觀の嚴肅ありや、冷靜の態度ありや。人生よりユーモアを除けば、此二者の存立は竟に得べからざるなり。

○

餘裕の半

現代文藝の士に餘裕なきは、憂ふべき事實なり。藝術家も人間として生存

面あれ

する以上は、今少しく餘裕なからざる可からず。餘裕なき人々の手に成る文藝は遂に小なる文藝なり。

されど、餘裕のみありて、摯實の氣を缺くは、亦文藝の士たるの資格なし。要は眞面目に動き、摯實に考ふる極めて嚴正なる半面に對し、餘裕の半面なからざるべからず。餘裕なく、洒落氣なき人は、其人遂に小人物たらむのみ。

○

發賣禁止に何の標準ありや

警視廳が風俗壞亂の名の下に發賣を禁止するは、抑々何を標準とし、何を根據として然るや。發賣禁止は、竟に其位に居るの人、法に依りて自己の意志を遂行するに在らむのみ。

○

藝術家と酒

酒の身體に及ぼす害毒は、今更云ふまでもなきことなり。余も健康なる時代には、盛んなる飲酒黨なりき。今にして思ふ、健康を害したる原因の一は、確かに暴飲の結果なりと。

過度の飲酒が、身體に害あるは別として、其職業に及ぼす影響は、實に强烈なるものあり。殊に藝術の士の創作に對し、酒ばかり强烈なる敵はあらざるべし。余の過去の實驗に徵するも、暴飲したる時代に成れる作品は殆んど一も無し。

既に完成せる事業の上に立つて、其事業を維持するの人或は一會社の上に立つて、之れを處理するの人は、常に酒に醉ふも、毫も關する所なかるべしと雖も、藝術家の如く、製作の新しきより新しきを追うて進む人に、暴飲は斷じて不可なり。不可なるのみならず、必ず其の職業より逐はるゝの止むなきに至るべし。

○

問題の爲

問題文藝と云ふ。而も問題の爲めの文藝には非ず。問題の爲めに文藝を取

り扱ふものとすれば、そは文藝其物の根本を誤れり。問題の爲めの文藝と云ふものゝ存在し得らるゝ筈なければなり。

イブセンは、其劇中に於いて、社會問題を論じ、トルストイは宗教を論じ、ゴルキーは政治を論ず、其他人種問題乃至人生問題を文藝に於いて論じたる例は尠からず、しかもそは問題を論ずる爲めに文藝を取扱ふものに非ずして、作者自身が、社會問題、或は政治、宗教問題乃至人生問題等に對して、眞實興味を有すればこそ、其興味が問題となりて、文藝の上に現はるゝに至るなれ。

要するに文藝は第一義にして、問題は第二義なり。（N）

○

余の作品にモデルなきはな

『酒中日記』にモデルあるは勿論なり。余の作品にしてモデルなきは殆んど無し。嘗て窮迫して原宿にありける際、彼の主人公の如き小學教師を知れり。

酒屋の隱居、學校の改築、寄附金募集總て事實なり。唯余はその小學教師の性格に配するに半ば自己の性格を以てせり。

作中金を拾ふ條下を描ける動機は、その前、霞が岡に逼塞せる頃の實歷譚なり。一夜金策に盡き、茫然として青山の原を家に歸へる時、偶と心頭に逢着せる問題は、今茲に數百金を容れたる財布を拾ひ得なば、今の余は如何に處すべきかの問題なりき。拾得して私かに消散すべきか、將た落したる人を尋ねて返すべきか、余は事實その二途に迷はざるを得ざりき。今にして想へば何んでも無き造作なきその些事が問題なりしなり。隱せ、返せ、と云ふその二つの私が聲に迷はされて、余は實際その金を手にせるが如く心迷ひたり。

余はそを正直に描けるのみ。

『酒中日記』を書きたるは、その後鎌倉に寓居して、少しく生活の餘裕を見出せる頃なり。窮迫當時は却つて、『歸去來』『小春』の如きものを製作せり。

余は薄倖なる作家也

○

余は可也薄倖なる作家なり。原宿當時の困窮はトテもお話になつたものに非らず。細君をして米の一升買をさせたることもあり。鰯と鰯のみ喰ひて生きて居たり。されど、余は唯の一度も悲觀がましき、ヒネくれたる考を持ちたる事なし。貧を樂しむの餘裕無きまでも、貧を恐れぬ程の量は慥に有ちたり。

元來余は穩和なる家庭に懷ツ子として育ち、慘憺たる世路の苦痛を嘗め味ひたる事なければ、如何に窮迫するも、根本には「何うにかなる」ものと云ふ思想を持てり。余は今猶ほ「何うにかなる」主義なり。又不思議にも何うにかなつて來たれり。他の汲々として生活に苦むを見れば、寧ろ可笑しく思はれたり。されば懷に一物なき程の窮乏の間にありても、酒も飲み、野菜もハシリに非らざれば喰ふ事をせざりき、屋賃を滯らして贅澤するとて家主の

西園寺侯の玄關にて

『少年の悲哀』中の娼婦

婆さんに怒鳴られたこともあり。

○

余は尙ほ自ら周旋して、原稿を賣り、糊口を求めたることなし。これ一つは、諸方の雜誌新聞の關係者に友人多く、その心配無かりしにも依るならんが、一つは極めて暢氣なる余の性癖にもよるべし。

余の西園寺侯に知られたるも當時なり。初めて晩餐に來れと招ぜられ、弊衣破帽にて出掛けたるに、玄關の書生はいたく卑しみて下駄をつまみ上げたることもあり。

○

『少年の悲哀』は事實譚にあらず、作中の娼婦も若者も共に架空の人物なり。されど娼婦だけは全くモデルなきに非ず。余が二十一二の頃豐後より東京に來る時なり。柳津に暫く滯在して、某の山に上るを日課としぬ。頂上祠あり、

風光極めて好く、柳津の町を瞰下す可し。而して余は殆ど毎朝の如く此山上にて會ひたる女あり。十六七の、顏蒼褪めて背のすらりと高き少女なりき。友禪模樣を置ける金巾の小袖を檢束なく着たる、昨夜の白粉が襟の邊に殘り居れる、無論いかゞはしき種類の女とは一目にて知れたれど、面長にて睫毛の長き實に印象の深き顏の女にて、何時も御堂の白壁にもたれて、便りなき目遣ひに凝ッと向うを見詰めて立つて居るなり。

その女、余はそれ限り會はず。而も、名も所も素姓すらも好く知らぬ其女の事が氣になりて、何時までも忘るゝこと能はざりき。今にても回想すれば、其佛髣髴として、言ひ難き哀愁を覺ゆ。知れる者なら尋ねて話して見たいやうな氣もするなり。後幾度かその女を描き見んと思ひしも成らず、偶々『少年の悲哀』を稿するに當り、その時の感じを表はさんと力めたり

『少年の悲哀』中の叙景は、余の目に熟したる柳津の町を書けるものなり。

一氣呵して成れる作品

書けばまだ書けるし、書き足らぬやうな氣もすれど、一面より考ふれば書き足らぬ位が丁度好かりしかも知れず。十二分の感興を藏して、其五六分を描けるものに非ざれば、印象が強く來らぬものなり。十分に書けば、どうしても平面的になりて眞の味の出ぬ恐れあり。書き足らぬより書き過ぐる弊は必ず多し。

○

『號外』は殆ど一氣筆を呵して成れり。自分の雜誌に自分の作品を出さゞるは不親切なりとの編輯者の詰責に已むなく一晩にて書きなぐれり。盛夏の頃、蚊帳の中に机を持込み、家族をすべて退け、片手に盃を持ちながら酒に乘じて書きぬ。即ち醉人が醉人を描けるなり。花袋君は其作風の全く常に似ざるに驚きて、獨歩は邪路に入れりと言ひしと聞く。無理もなき事なりと自らも思へり。

一氣にして成れるもの、別に『牛肉と馬鈴薯』あり。こも亦殆ど一晩と一日位にて書けり。神來と云ふべきものか、頭の中に感情がグル〳〵渦の如く溢れて、筆持つ手の遲きを恨む程なりき。

余の製作中は、始末に困るとは常に家人の云ふ所なり、書き出す一週間も前より神經興奮して、あらゆることが鋭く觸り、癇癪は絶頂まで高まり、机に向つて書く間も氣が甚しく立つて自ら烈しき苦痛を感ず。その書き終れる時は、ホッと息を吐き、氣が拔けたものゝ如し。故に曾て一度も自作を讀返へしたることもなければ、推敲したることもなく、直ぐ封じて送るを常とす。脫字があらば勝手に挿入し呉れなどゝ云ひやるも珍しからず。

○

『春の鳥』は余が佐伯當時、事實、ある少年を描けるものなり。現に今も活きて居れりと聞く。

その少年と云ふは、金箔附の白痴にて、奈何に啓發し、誘導し、教育するも、殆ど數の觀念なし。當時の余は甚しき空想家なりしを以て、慥に教育し得るものと信じて疑ふ所なかりき。腦組織中の或一部に障害ありては全機關の作用に障害を及ぼすものなるを以て、其れを除き去らば、自然の靈知は閃光の如く湧立つに相違なかる可しと信じて、亦疑ふ所なかりき。故にあらゆる方法を試みて教へつ賺しつ、時には叱りつけてまで、泣くが如き思にて教育せり。然れども遂に教育の效果も見ること能はざりし時は、余と雖も自然を疑はざるを得ざりき。

○

肉慾描寫の可否は要するに作家の態度次第なるべし。これを日常、座談に見るも然り。眉を下げ口に唾して淫猥事を說く者は見て居てもいやしげなり。同じ事を說くにも眞面目に思切つたる顏して云ふは、さまで聞苦しからず。

こゝなるべしと思ふ。

○

病牀愛誦の書

余が病牀愛誦の書、曰く『淵明詩集』、曰く『菜根譚』、曰く『維摩經』曰く『歎異鈔』、曰く聖書等。聖書を讀むは詩として讀むなり。

○

淵明の句

淵明は最も好む詩人なり。その詩集中より特に會心の句を擧ぐれば、

木不植高原。今日復何悔。

日月擲人去。

日月有環周。我去不再陽。眷々往昔時。憶此斷人腸。

荏苒歲月頹。此心稍已去。

量力守故徹。

已矣乎寓形宇內復幾時。曷不委心任去留。

好讀書。不求甚解。每有會意。便欣然忘食。

世短意常多。

一去三十年。

その他『歸去來』の如き愛誦措かざるところなり。有名なる、採菊東籬下、悠然見南山の一句の如き、誦する毎に滋味盡きざるを覺ゆ。

○

余とウオルズオルス

余はウオルヅオルスに負ふところ多し。今の新藝術を說く者この湖畔詩人に及ばざるは何故ぞや。渠を解せずして新しき藝術を說くは無理なり。

余嘗て渠の詩集を評註せることあり。その書今ある所を知らず。

余の佐伯時代はウオルヅオルスの崇拜沒頭時代なり。

○

余は初め

余は小說を書くに初めより趣向を立てたることとなし。唯或る人物と或人物

より趣向をたてたることなし

『渚』の趣向

を配し、これを研究し、これを調査し、これを滿足に描かんとするのみ。余の描かんとするは人なり。

○

今少し病氣輕快せば、余は一日一頁位の筆を取ることを得べし。その時余は先づ『渚』を完成すべし。『渚』は十數篇のスケツチより成る。最後の一篇は余自身を主人公となす。即ち病牀悶々の餘、散々癇癪を起して家人介抱の徒を苦しむ。果ては狂氣の如く暴れ廻りて、自ら血を出すに至る。それを第一人稱にて友人に報ずるやうに描いて見る氣なり。先づ書出しは斯うなり。

某君足下。余は狂せり、傍の者狂せりと云ふ。醫者も亦然か云ふ。昨夜一晩暴れ廻りて自ら損じて血を見るに至る。君もその樣子を見たらんには、嗚呼憫れむべし、××も到頭病氣の爲め氣が狂つたと歎息するなるべし。新聞や雜誌にもしかく報道されん。

君はこの手紙を見ば、恐らく仰天して飛んで來るべし。やめよ、やめよ、御損だからやめ給へ。第一汽車賃往復一圓八十錢だけでも損だから止め給へ。

何んとなれば、君だけに窃つと申上ぐべし。人には——特に余には芝居氣のある事を御承知なるべし。芝居氣なくんば人の世は砂漠たる可し。余の昨夜泣き喚きたるも暴れ狂ひたるも、家人と醫師とを打擲せるも、總て事實なり。怒りて咽に指を突込んで血を吐きたるも事實なり。爲めに今日は心神困憊して起つ能はず、病症の増進せるも事實なり。

されど、聞き給へ、余は其時暴れ狂ひながらも些の怒と憤りは余の心にあらざりき。悲しいより口惜しいより、人々が余の狂態に驚き慌てるさまを見る事の方が遙かに愉快なりき。面白かりき。最少し〳〵やつてと云ふ氣になれり。

手ッ取り早く申上ぐれば、人は自分の血を犧牲にしても猶芝居をしずに居ぬものなり。

斯くの如き書出しにて、その狂亂の態を描かんと欲す。（五月十九日）

この趣向は餘程得意のものらしく、上に掲げたる冒頭數節の如きは腹案殆んど文章をなし居り、そを朗讀する如くに授けられたり。不文、原意の半を損じたるべしと雖も、當日記憶のまゝ直ちに錄せるものなり。他の一篇、湊町の海岸に海女とその嬰兒とを描かんとせる趣向も、殆んど文章のまゝ授けられたれども、惜しむらくは其大半を忘却す。何んでも一頁位のものなりしと覺ゆ。題は『秋雲』なりしか。

○

『暴風雨』の主人公

『暴風雨』は親友今井某を主人公とせるものなり。希代の才人なりしが、惜むべし痲痺狂にかゝりて死す。今井は常識の人にて狂質ありとは何うしても見えざりき。却つて國木田は狂氣すべしなど笑はれたる位なり。罹病後余の爲めにツルゲネーフなどを度々譯しくれられたれど、文辭殆んど意をなさず、何んの事か一つも解らざりき。今井は獨逸文學者なり。惜しむべき才人なりしよ。

『暴風雨』の題の由來は、最後の一章に今井が狂氣して暴風雨の鎌倉中を狂奔するさまを描かんとせるなり。その一節だけは文章として立派に出來て居る。

余にして病癒えず到底筆に親しむ能はずんば、せめてその最後の一節のみを細君に書取らしめ、間の事件は梗概の談話筆記なりとも揭げて、是非一冊の本に纏めたきものなり。それも能ふや否や覺束なし。

○

露伴と蘆花

露伴の脈は上つたと云ふ人あり。早計ならずや。理窟を離れて余は、露伴と蘆花とに大作を示さる可き時あるを信ず。

『空うつ波』は余もイヤなり。

一葉は天才なりや

○

一葉は果して希代の天才なりや、余これを疑ふこと久し。

感情を單純にせよ

○

今の小説家は今少し感情を單純にせざる可からず、書く氣になりて考へるから惡いのなり。感じたるまゝを書け。

臆測もあり誤解もあり

○

○○の自然主義攻撃その動機は好からん。又異説者もなかるべからず。然しながら些と臆測揣摩に過ぎるものあるやうなるは惜しむ可し。

兩方に誤解もある可し。

紙の上にて論ずるゆゑ議論が決着せぬのなり。一晩ユックリと相遇うて、ビスケットでも咬りながら膝詰めに、氣長く談らば兩方自然と了解するならんと思ふ。これ兩方のためなり。

抱月と漱石

○

抱月の批評は智の上に感情を置き、漱石の批評は感情を智の器に盛る。

珍らしき主義にあらず

○

自然主義とは珍らしき主義にあらず。耶蘇以來幾度も繰返されたる問題なり。

○

兎に角、早く癒つて書きたい。（五月二十日）、

第五　雜觀

余はヒガミ根性を起せることなし

○

世間往々にして余を輙軻不遇の作家なりと云ふ。お氣の毒樣なる哉。余は一度もそんなヒガミ根性を出せることなし。寧ろ余ほど幸運なる作家恐らくは無からん。成程貧乏はせり、又落魄もせり。されど自ら不遇を慨くまで自信なき男にはあらざりし。（六月十二日）

余は決して不遇ならざりし

○

余の細君は極めて余に忠實なり。如何なる窮境に處してもツイぞ一度愚痴がましき事をならべて余を惱ませし事なし。金錢はそこらの戸棚を探せば、

出る位に思ひ居たり。

余には親友あり、眞逆の時は余を餓ゑさしめざる可し。

余には父あり、母あり。父は極めて暢氣濶達の人にて、余を信ずること篤く、而して亦貧乏には平氣なる人なりき。霞が岡に余の窮迫時代、すめる酒よりドブロクが遙か旨まい、と眞底から喜んでドブロクばかり飲んでくれた人なり。

母は直情徑行の人、余を盲愛するの外何事もなし。

弟收二は悌弟なり。余の爲めとならば殆んど身命をも辭せず。稻垣と喧嘩して公使館書記の職を敝履の如く抛ち、暹羅より歸朝して吾が家にあり、三度々々の惣菜に馬鈴薯をヘツトに揚げたやつのみを喰はせられても、些の不平も云はず、貧兄の爲めに虎の話か何かを飜譯して家庭雜誌に賣り、以つて一家五口の米鹽の資を補けたり。而して、其贅澤に馴れたる外交官殿に偶々の

御馳走と云へば鱒か鰯なり。

余は決して不遇ならざりし。

○

余が酒の上

余はどちらかと云はゞ酒の上は、餘り好き方には非らず。家族にも友人にも隨分迷惑を掛けたり。度を超ゆれば暴れる方なり。嘗て某所に泥醉せる時の如き、有繋に辛抱強き未醒も持て餘して、余を擲らんとせることあり。

然し余とて滿更の馬鹿ならず、醉つて威張りながらも、心の内に大抵の限度を置き、これだけ醉つてると認めて居るゆゑ、この位までは好しと、束をきめて氣焰も吐き亂暴もするなり。

又余は結果に對する最好の方法も飲込み居たり。即ち、昨晩は酒の上で、と謝れば、大抵の事は赦さるゝなり。

酒飲は利口なる者なり。多人數の席に暴れる時は、必ずその席中に豫め一

二の味方を作り置くものなり。（五月十九日）

○

酒は加六の酒

酒は加六の酒にあらざれば飲まず。加六とは讀賣新聞社筋向う寫眞屋裏の正宗ホールなり。嘗て『號外』に書きたるところ。恐らく東京市中にて生一本の灘酒を得んと思はゞ加六の外無かる可し。無論吾々平民の話なり。加六主人は愛すべき男なり。相應の身代を酒に潰してメートル賣りの酒屋とまでなり下れる男なり。細君も面白し。

あゝ、早く癒つて、鯖鮨を肴に加六の酒を引ッ掛けたし。

余の酒量は大ならず。されど日に一升五合や二升は常に飲めり。朝で好し、晝で好し、夜々中でも飲む。余は酒の爲めに今の病を得たり。

酒は趣味なり、嗜好にあらず。

酒に量なし。量を限り後を思はゞ、初めより飲まざるを可とす。（五月十三日）

斯る事を云ふ獨歩には非ざりし

○

飲酒の慾は喫煙の慾より忘れ易しとは事實なり。余の當院に入れる頃は、未だ兩方の慾を忘れ得ずして、頗る閉口せるが、習ふより馴れろ、日を經るに從つて今は兩慾全く無し。酒の臭、煙草の臭を嗅ぎても胸惡るし。

余は多くの人に禁酒を勸めたし。思ふに禁酒は考へる程苦しきものには非らざるが如し。節酒なぞは到底出來るものに非らず。

あゝ衰へたる哉。余は斯ることを云ふ獨歩にはあらざりし。呵々。(六月十日)

氣焔はシラフにて吐け

○

酒の元氣に氣焔を吐く者は卑怯なり。氣焔はシラフにて吐け、酒には唯醉はんことを思ふべし。

花袋未醒

○

花袋の酒は憎し、頽るゝ時なければなり。未醒の酒は好し、顏が愛らしくなればなり。風葉の酒は貴ぶべし、天眞流露毫も障礙する所なければなり。臨川の酒は壯なり、起ちて地を斫るの概あればなり。

風葉臨川の酒

○

果實中の王

余の嗜好中の第一に居るは果實なり。これあるに依りて病苦の半ばを救はる。痛苦甚しく、困憊甚しき時も、此の新鮮なるを喰へば、血漿頓に淨められたる心地す。その色、その匂、以て五官を癒すに足る。

亞米利加蜜柑、苺、梨子、林檎、葡萄、總て惡しからず。特に余の好むは水蜜桃なり。その形に於て其香氣色彩に於て果實中の王たるべし。

○

嗜好に贅澤なる癖あり

余は嗜好に贅澤なる癖あり、果實の如き泉屋の上等品にあらざれば喰ふを欲せず。果實一籠に十金を投ずる惜しむところにあらず。

○

其聲忘るる能はず

余は花を愛す。草花を愛す、夏の草花を愛す。淡く寂ある色よりも、濃く強き色の花を愛す。

○

余は小禽を愛す。その聲を愛するなり。特に鶯の清凄、垂鈴を振るが如きを愛す。大久保にある頃、簷頭に此禽を養ふ。知人旅順より携へ來りしものなり。ある朝、長夜砥上に坐する如き病鬱に倦み、懶眠心なく拂曉の庭を見る。此時一聲、或は二聲、凛として耳に鳴るの聲あり、餘韻長く引きて耳朶に消ゆ。この禽を飼うて數月、始めて其聲を聞けるなり。余細君を顧みてそを云ふ。細君は半ば眠りてあり、余の耳を疑ふものゝ如く、又スヤスヤと眠る。

その聲遂に忘るゝ能はず。（六月十七日）

○

水を愛し雲を愛す

利根の大流に泣く

傷る者は溺る

百姓は懶

余は水を愛し、雲を愛す。

雲を見て空間の無限を恐れ、海を見て空間の無限を知る。然かも、海に立つ毎に余は必ずしも對岸を思はざる事あらざるなり。

夏の波は高く、冬の波は低し。

土用七月の波、これを犬吠岬に見る。その壯觀未だ忘るゝ能はず。

○

河流を見て天地の悠久を知る。斯の水、斯の人、何の時か亦相會はんや。

利根の大流に潸然として涙を濺ぎしことありき。

○

漁夫は水を恐る。水を侮る者は溺る。水に達せぬ人は水を侮るものなり。

○

漁士の勤勉を見よ。渠等の船を愛し、網を愛するを見よ。

惰也

それに較べて百姓は多く懶惰なり。

漁士の一生は鬪也

○

漁士の一生は鬪なり。渠等は海に養はれて然かもその海と戰はざる可からず。船を愛する所以なり、身を救ふ器なればなり。網を愛せざる可からず、身を養ふ器なればなり。

茅ケ崎の空氣は荒し

○

茅ケ崎の砂は鎌倉に比して色黑く粒大なり。風物荒寥たる所以なり。茅ケ崎の空氣は荒し、肺を病む人には適せざる如し。又濕と乾との差も甚し。

茅ケ崎は松と麥と桑と甘藷の外、目を慰むるものなし。

○

「お富士

東海道は富士山に負ふ所多し。富士無かりせば、東海道は斯くまで繁昌せ

樣」

骨になつて歸るはイヤだ

さりしならん。沿道の土民呼ぶに「お富士樣」を以てす。誠に所以あり。

○

「矢張り東京位好い所は無い」とは好く聞く言葉なり。されど旅にして東京を憶ふ位では、未だ眞に東京を愛する者にはあらざるなり。

余は東京を有す、旅も亦惡しからずと云ふに至つて、その眞に東京を愛するを見る。

東京は吾が故鄕なり。余は病牀にありて遙に東京を憶ふ毎に涙を禁ずる能はず。

今一度東京の土を踏みたし、擔架に乘つても好いから東京の土を踏みたし。骨になつて東京に歸るはイヤだ。（五月廿八日）

校訂してこの章に至る。涙落つ。獨歩氏長き病院生活に倦み、一日も早く東京に歸らんことを望み、場所を大久保或は高輪、家を西洋室或は和風室にと、四

五日間その話のみに暮らす。特に中二階の書齋は氏の理想にして、その設計の如きも略〻腹案ありき。『欺かざるの記』さへ校訂し終らば或は理想の書齋に仰臥するを得んと、これのみ樂みとせり。又退院の日は悉く知己を招きて盛なる海遊會を開きお祭り騒ぎして東京に入らん。揃の浴衣も好からずやなど打興じ居れり。然れども、嗚呼、獨歩氏は六月二十七日遂に骨となりて東京に入れり。

○

余は夏を愛す

余は夏を愛す。夏の來るを見れば、心そゞろに悲しく慌しけれど、その間の趣味や、口、說く可からず。

○

嗚呼東京の果實熟

余は東京を去るの日、その地に接吻せざりしを悔みとす。

嗚呼東京の酒、東京の霧、東京の魚、東京の響き。

○

交友は無理をせずに相會うて始めて會心の友を得るものなり。

する如く

名を聞き人を聞き、相慕ひ相望んで遇ひたる友人に、親友として長く交はれるは稀なり、果實の熟する如く、機熟して相會ふ所に眞の親友あり。

○

親友たる可き運命

友を得るに急なる勿れ。親友は自然に得るものなり。渠と之との親友たるべき運命は既に〳〵定まりあるなり。求むることなくとも、その運命の友は自然に得らるゝものなり。

○

余と舊知己

余は舊知己に棄てられざるを以て矜りとなす。新しき友を探して廻る者は遂に眞の友を得る時なけん。

○

友は皆余に篤し

余ほど友に薄き男は恐らく無かるべし。然れども友は皆余に篤し。これ余は一度も友を欺きたる事なければなり。

交友の難有味

○

交友の難有味は平常の日に解し得らるゝものにあらず。病牀にして沁々そを感ず。余は度々友の情に泣けり。

友は自己也

○

友と交らば三分の俠氣あれ、と、余は俠氣すら無き友を欲せじ。友は自己なり。

讀者は單にお得意樣にあらず

○

友を思ふ毎に想ふは讀者の親切なり。余は病中これ等可憫の小さき眞心に幾度勵まされしぞ。余は山の果、海の彼方に是等の味方を有すと思ふ毎に、勇氣殆んど百倍するなり。

讀者は單にお得意樣にあらず、余の光なり力なり。

○

余の胃袋

余の胃袋は非常に强健なり。余は胃袋のために垂死の軀を繩に支へ居るなり。

樂、王侯にまさる

○

刺身は鰹魚を最上味とす。鮪を說き鯛を云ふ者あれども余は與みせず。初夏新綠の候、榻を樹下に据ゑて十片の刺身、一壺の酒に醉ふ、その樂、王侯にまさる。

あらゆる響

○

余は總ゆる響を好む。假りに響無き世界ありとせよ。人は直ちに悶死すべし。

運命と事實

○

余は半面に於て運命論者なり。而して他の半面に於て又事實論者なり。吾人の日常遭遇する總ての出來事を以て、直に單純なる事實とのみに解釋し了

ること能はず。事實以上、吾人の力を以て豫測し難き運命の存することを認む。

人は常に、「成るやうにしか成らず、」と云へる一種諦めの語を口にす。之れ或點以上は吾人の力を以て抗すること能はざる運命の力を認めたるなり。或點まで人は運命を作ることを得れど、それ以上運命の力に抗すること能はざるものなり。

世には貧にして着るに衣なく、食ふに食なく、まさに飢ゑ凍えて死すべき筈の人間が、尚ほ如何にかして生存し、巨萬の富を積みて死するの要なき人が、或は耶馬溪に、或は伊豆の山中に死す。斯くの如き轉倒せる事實を以て、單純なる事實とのみ解するを得んや。吾人の智力の未だ到底豫測し得ざる何等か神祕不可思議なる力の存するありて、吾人の一生の半はその手に操らるゝには非ざる乎。余は此力を以て運命と解するなり。故に余は吾人日常の總てを通じて單に事實とのみ解し、運命の力を否定し去る能はず。然れども又總てを運命の力なりと斷定して、運命の力以外全然人間の權威を認めずと言ふに非ず、所詮、吾人一生の起伏を通じて、事實と運命とは相半ばするなり。されば余は半面運命論者として、半面事實論者たるなり。人間の權威能く運命を作ることを否定せざると同時に、或點以上人力を以て運命に抗すべからず、運命の力に、人間は服從せざるべからざる事を肯定す。

或意味に於いて運命論者は不幸なれども、また幸福なることあり。人は、人力を以て運命の力に抗すべからざる事を知る時、其處に悟道を求め、安心を得、余の『運命論者』は全然空想に依りて、作られたる人物なるも、此運命に對する余の思想を具體化したるものなり。

空想と雖も事實を知れる吾人の頭腦は、事實以外の空想を作ること能はず。或意味に於いて、空想は直に事實なりと云ふ事を得べし。（N）

推理力と記憶力

○

人には推理力の強きと、記憶力の強きと二種あり。概して、推理の力勝ちたる人は記憶の力弱く、記憶の力發達したる人は推理の力劣れり。推理力強くして記憶力又強き人あれどそは殆んど罕にして例外と云ふべく、斯くの如きは畢竟非凡なる頭腦を有するの人に非ざれば能はず。

余は前者に屬せり。余は少時より推理の力非常に強く、小學時代に於て、教師も傍輩も解し難かりし數學の問題を、二日を費して、遂に解き了せたるが如き例屢々ありき。之に反して記憶力はいたく劣れり。殊に眼より入り來る印象は極めて明かなるも、耳より入り來る事象に對しては更に記憶する力なく、人名などに至りては殊に甚だし。今日聞いて明日は忘れ、三回四回と面會して顏のみは明かに印象するも、姓名は更に記憶せず。合理的の事ならば記憶し得らるべきも、人名の如く甲某を乙某と變じ、乙某を甲某と變ずるも事實に於て何等の差支へなき唯、單に符牒に過ぎざる極めて曖昧不合理なる事は記憶し難きなり。(N)

釣魚の趣味

○

大海及び大河に綸を垂れて釣するは悠長なりと云ふ人あり。されど、そは未だ水と魚との關係を知らざる人の言なり。廣き海、大なる川にても、魚の集まれる所は極めて狹く、魚の通過する道は極めて細きものなり。其集まれる所、通過する所を選ばずして綸を垂るゝこそ愚かなれ。之を知り之を選んで綸を垂るゝは、決して愚かなる伎に非ず。

人は地球上の凡てに棲息すべきものに非ず。大海の上にて人を釣らんとするは愚なれども、ロンドンの市街、東京の市街を見て一網投ずる時は、幾人かの人を獲んこと決して難きに非ず。釣魚の業亦此理のみ。

又釣魚の樂みは、釣れる時と、釣れざる時とあるが故なり。魚の見えざる水

に綸を垂れて、釣れるか釣れざるか分明ならざる其處に釣魚趣味はあり。（N）

○

余と來訪者

余は務めて來訪者を失望せしめざらむことを期す。故に自己の苦痛を忍びても、尙ほ來訪者に出來得る限りの滿足を與へんと欲するなり。

人と相對する時、自己の感情を包みて、沈默する人は、其人必ず率直なりと言ふべからず。余は人と相對して分時も默すること能はず、人在れば必らず語る。こは感情上の問題なれど、默して相對すること久しき時は、兩者の胸に、何等か或物の蟠れるが如き心地して、苦痛なり。（N）

○

自信あれ

人及び其交友に對して、技巧を弄する人は自己に確固たる信念なきが故なり。自信ある人は決して己の感情を僞らず、小細工を弄せずして人に對し、人に交る。人に對し、人に交るに、自己の感情を些かも修飾せず、最も直截に披瀝し得る人は、固き信念あるが故なり。自信なき人は己の感情を披瀝するの勇氣なし。自信ある人は他人の毀譽褒貶を意とせず、人は何と言はむも余は余なりと云ふ强き信念あればなり。自信なき人は、他の一言一句を苦にす、故に直截に感情を發露すること能はずして、技巧小細工を弄するに至るなり。（N）

○

幸福とは何

吾人は幸福の定義を下すこと能はず。麥と粟とを常食として貧困の中に幸福を感ずる者もあれば、又、芋と鰯とのみ食して心足らへるもあり。或は美衣に倦み、美味に飽きて、尙ほ不幸に泣く者もあり。抑も、麥と粟とを常食とし、芋と鰯とを常食として、其日を送る人々が幸福なるか、將た又美衣と美味に飽くの人々が不幸なるか、觀じ來れば、吾人は幸福の本態を捕捉するに苦しまざるを得ず。（N）

○

旅行の趣味は、余の最も愛好する所なり。旅に出でゝ心暢びやかに滿目の風物、すべて新たなるを見る程樂しきは非ず。されど、余は同じ旅行にても、轉々處定めざるよりも、或る一所を定めて、其處に霎時滯留するを好む。

余は湯ヶ原を好む。別に意味あるに非ず、唯、何となく好ましければなり。今にても少しく自由の適ふ體なりせば、余は直ちに湯ヶ原に行かん。

旅行も、初めは簡易にて快を取ることを得しかど、今はそれも得難し。次第に贅澤となり、些かなる旅行にも費用のみ嵩むやうなりたればなり。(N)

○

余は近來の經驗によりて、睡眠の如何に尊むべく、如何に重んずべきかを知れり。快き眠は力なり、新しき力なり、血球も筋細胞も恐らく這の間に增殖するなるべし。睡眠は單に休息のみにあらず。

グツスリと眠りたい

余はこの二三ヶ月以來、殆んど一日も自然の睡眠を得たる事なし。何時も催眠劑を藉りて纔に眠るなり。然かも熟眠にあらず、半覺半醒の境に搖らる事殆んど五六時、後ち必らず咽頭の塞栓せらるゝを覺えて目覺む。覺めて見れば果して咽頭内は紙の如く乾きて、口も容易に利けず、この時一杯の水生命より貴し。

されば、覺め來るも心氣濛々として、疲勞の些も癒されたるを覺えず。覺むれば卽ち昨夜の病苦をその儘續くるのみ。その不快云ふばかりなし。夜明け暮方、今の余には何んの違つた聯想も無きはこの故なり。

あゝ、自然にグツスリと、唯の一日でも好いから眠つて見たい。

○

催眠劑ほど不快なるものはなし。この激しき藥石は何時も異物の如く胃袋の中に滯留する心地す。

催眠劑ほど不快なるはなし

夢は樂しきもの也

○

夢は樂しきものなり。余にはそれが唯一の慰藉たる事もありし。されど近頃の夢は、夢全くの夢をなさず。多くは夢見るが如くして現を聞くが如し。グル〳〵と頭を駈廻る夢は、將に睡らんとする時の幻像の續きなり。夢は睡りの中に獨立ならざるべからず。現實界の交渉、不交渉を受くるばかり不快なる事なし。

芭蕉の辭世、「旅にやみて夢は枯野をかけめぐる。」このかけめぐると云ふ一句、如何にも半死半覺の人の心をあらはせり。旅を思ふ心と解せるは謬れり。

前額記

本篇は獨歩氏が病を得てより以後、自ら執筆、又は口授して二三の雜誌に掲げたるものと、筐底に藏して公にせざりしものとを收む。

前額記

相州湯河原にて書き出し

○七月三日

山々の麓には村あり村々の奥には墓場あり。

ア、生々死々の流、何の時にか擧げて永劫に入らん。

（湯ケ原にて書けるは、僅にこれのみにて、直ちに以下湊町療養中の日記に移る）

○九月三日　午前七時十二分新宿より乘車して日暮里停車場に下車、此處にて八時四十分發の海岸線に乘換ゆ、見送者、滿谷國四郎君、齋藤謙藏君夫婦、小杉未醒君夫人。

海岸線は初めての事ゆゑ、興味深し。天氣晴れて白雲片々浮遊す。小杉兄は熟知ゆゑ窓外の景色を説明す。霞ケ浦の水溢れて淼漫海の如し。車中にて東京より携へし西瓜を食ふ。

水戸に着せしは十二時四十幾分、杉田氏出迎へらる。杉田氏の宅にて三時まで休憩、三時半發の那珂川下り汽船にて湊町に向ふ。一時間を過ぐ僅少にして着、直に車にて牛久保の別莊に向ふ。杉田氏も一行中に在り、別莊に着して間もなく日暮る。杉田氏は六時發の汽船にて歸れり。

○四日　朝、小杉氏と共に別莊の斷崖下の海濱を散歩す。午後は前日の疲勞にて臥す。小杉氏は平磯に遊ぶ。

○五日　午前、小杉氏と共に平磯に遊び、海水浴場として實に相州海岸の及ぶ所に非ざるを驚く。市に酒を買ひて飲む。歸宅すれば杉田氏あり、午後は此三人にて飲食す。

○六日　小杉氏九時發の船にて去る。小杉氏去りし後、張棒の親方及び若者一人と小舟を磯にうかべ釣を試む。波高く舟木の葉の漂ふが如し、中止して歸る。午後發熱、臥す。

○七日　午前、女、子と共に海濱に遊ぶ、午前は干潮也、タマを取りて食す。タマとは小さき貝の一種也。

午後發熱、但し少時間也。

概して發熱時間極めて短かくなれり。

○八日　海より吹き送る風强く戸を開き難し、終日閉居ゴロゴロして日を送る。

○九日　午前、少時間海濱に女、子を伴ふ。終日烈風、戸を閉づること昨日の如し。

○十日　湊町の大祭。曇天、細雨時々來る。午前早くより張棒の親方一杯キゲンにて來る、酒を出す、午後まで語る、親方去りて間もなく杉田氏來訪、四時頃まで談話。發熱九度二分、冷水にて冷やす等、近來になき苦しみをなす（十二日午前認む）

○十一日　曇天、北風、冷氣大に加はる、午前少時間イヤ〳〵ながら子供にせがまれて海濱に出づ、午後發熱、九度二分、終日床上に轉々す（十二日午前認む）

○十二日　以上二日にて身體大に弱る、本日晴る、祭見物の人々、崕下の道をぞろぞろ（午前認む）

食事相變らず進まず。

十日前は身體大に強味を加へ發熱の度も時間も減少せしが十日の發熱以後、頭腦朦朧全體だるくして綿の如し

水戸茨城新聞の尾上清昌氏より來狀、同氏は鷹見君の友。

治より來狀、銚子の母よりと、森田よりとの端書を封入。

○十三日　十二日の午後發熱九度二分に鬱りて、本日は終日靜平安臥の爲め、熱も九度に上らざりし。薄暮新月の清光を踏んで牛久保に下り散歩湊町街道に至りて歸る、漁家夕食の時、燈火内に明らかにして夕闇外にほの闇く趣ある光景なりし。

○十四日　午前子供等と共に平磯に遊ぶ、家を出づる時已に發熱の兆あり、市街及海濱の一部を漫歩して歸路に就くや疲勞困憊、遂に路上にしやがんで息ふに至る。

歸れば發熱高く九度五分に至る。

解熱劑を用ゆ、流汗淋漓。また〳〵治子より氷嚢及氷被到來す、直に使用す、流汗半ばにして杉田氏來訪、快談、撮影。夕食は氏の土産なる、山芋にてとろゝを作り氏と共に食す。氏去る、夜に入りて突然「いばらぎ」の高谷氏來訪、蓋し杉田氏と行違ひになりし也、快談少時にして去らる。

夜やゝ更け床に入るや發熱九度以上に達し、轉々反側眠る能はず、空想幻想交々到り「神は愛なり」の一篇に着到せり。眠に入りしは午前三時なりし。

○十五日　熱度低し前日にこりて外出せず終日閉居す。

○十六日　熱度最高、三八、九、午後杉田氏の妹むこ森氏來訪。

○十七日　强風雨、最高熱度三八、一。

○十八日　暴風雨、雨の戸を打つ音、小石を投ずるが如し。

最高熱度は三七、九。

夜に入りて雨晴れ陰暦十一日の月澄み、風落ちて野は葉末の雨露かゞやき蟲聲しげし、太平洋は銀波を流す。

○十九日　晴天、秋色清し、夜に入りて月色美なり。此日津山の人、松井秀雄氏、余をたよりて東京より來る。蓋し前日上京せるなりといふ、同氏は北山益治氏の從兄弟なり。

○二十日　風を冒して海濱に出づ、午後杉田氏來訪。此日最高熱度三七、六。

○二十一日　暴風雨、夜に入りて狂暴を極む、殊に午後九時、十時のころ最も甚し、大雨横さまに家を衝き雨戸外れんかと大に恐怖す、最高熱度三七。

○二十二日　夜來の烈風止まず、雨は止みぬ。日光雲間より白浪を射て海上の光景壯美なり。

趣味の數々

◎人は自家の境遇以外、容易に他の境遇を知る能はざるものなり。あらず、他の境遇には餘り注意せざるものなり。

◎人を知らんと欲せば其境遇を知らざる可からず、人を學ばんと思へば其境遇を知らざる可からず、人を描かんと思へば其境遇を熟知せざる可からず。

◎境遇、其物にのみ既に面白味はある也。平凡の人物も特殊の境遇に置て見れば、特殊の色彩を放つもの也。

◎此趣意に依りて、余は自今、他の境遇に注意、觸目せし丈けの處にても可、これを一々、記し置きて我詩の元糸となす可き也。

◎隣室に老母と三十二三の婦人とあり、若き婦人は海軍士官夫人なりとか、士官は先頃米國に渡りし内、此二人は東京の家をたゝみて、海濱に來りて旅館の生活を營みつつある也。其方が經濟なる由、女中は語れり。

◎此近所の山に近き頃要塞出來つ、これに務むる兵士、此旅館と親しみて、こゝより

要塞に通ひつゝあり。

◎半島の要塞、半島の旅館、其双方に住む人も皆な頗る退屈ならざる可からず。

この斷片は氏の歿後遺稿整理の際前額記と共に筐底より發見せるものなり。恐らくは銚子滞在中のものならん。

死と自覺

死とは自覺の滅する事ならずや。

我等の智識は比較を好み、比較に依つて判斷の正確を保證す。

惰力にてレールの上を走る汽車が、遂に停止すべきを判斷するは比較法に依るなり。

死に近づくに連れて人は生存の自覺を次第に薄らがすものなり。然る以上、死は即ち生存の自覺の停止ならずや。

この一節は四十年十二月頃、大久保の自宅にて自記せられたるものなりと云ふ。小説及び書翰以外、恐らくは這種の文字の絶筆なるべし。

趣味に就て

◎主義の勝敗と言はんよりも、世の中は趣味の消長とこそ言ふべけれ。

◎主義の爭に於ては、昨日の敵今日の味方となることあり、斯る場合の調和者は趣味なり。若し夫れ趣味の相違に至つては、たとひ如何なる明快の論法を以てするも其一致や一朝一夕にして爲し難し。かりに彼等の頭腦は相對してうなづくとも、其心情は終に和することなけん。

◎朋友知己とは何ぞや、教育とは何ぞや、變節とは何ぞや、失戀とは何ぞや。趣味の一致ありて始めて眞個の朋友知己あり。趣味の教育ありて教育の目的は過半成就せらる。趣味の變化ありて人は或場合に變節者の如く罵らる、曰く彼は先の主義を捨てたりと。趣味の衝突は失戀の大原因なり。

◎文學者詩人の勝利とは、其詩人文士の趣味が世上の趣味を動かし移し同化せしめたる場合を意味す。

◎望月小太郎氏は何故にしかく或新聞記者等の指笑を買ふや、彼が擧動の或部分が記

者等の趣味に適せざれば也。而して世上の多數は記者等と同趣味なれば也。記者等と雖も望月氏を以て未だ惡人なりと評したることはあらず。

◎實驗に依て始めて得る所の趣味あり、かゝる場合に於て尤も多く人と人との誤解は生ず、何となれば、甲の實驗する處、乙必ずしも實驗せざれば也。

◎既に趣味といふ、甲の好む處必ずしも乙の好む處に非ず、乙の樂む處は必ずしも甲の樂む處に非ず、甲の迷ふが故を以て、乙が俄にこれを否定するは非也。

◎されど趣味の相違より生ずる爭は多く頑執なり。人生の悲慘の源泉をこゝに發する亦少なからず。

◎趣味は變化す、我知らず變化す。

◎趣味は養ふべし、教ふべし、變じ得る也。

◎好趣味の支配する國をこそ文明國といふ。此點より言へば米國は疑問也。但しこれは余の趣味より來りし疑問なる可し。

◎文明とは何ぞや、曾て犬養毅氏は志賀重昂氏に向て問ひぬ。志賀氏答て曰く、例せば家族團欒して苺を喰ふが如きこれなり。犬養氏曰く、大根にては不可なるか、君の

言の如くんば文明と野蠻の相違は苺と大根の差異なりと、新聞紙は以上の問答を傳へて當時の笑話となしぬ。されどこれ其實に於て趣味の相違なり。志賀氏は一家の團欒てふ事實に重きを置き、西洋人は團欒を愛する特に深く、而して團居して苺を喰ふてふ語は直に西洋人的衣食と團欒を意味する也。則ち志賀氏は西洋文明の中に存する或點に關して自己が感得し愛着する所の趣味を表白したる也。而して犬養氏は、冷語を放て之を嘲りたる也。實は其趣味に於て相違する所あるなり。

◎洋行者は歐化せらると稱す、蓋し多くは西洋文明の產する所の衣、食、住、社交等に關し、其趣味の變化し來る也。

◎世には高き趣味を懷けるが爲に、不幸なる運命を擔ふ人あり、或は高き趣味の爲めに甘じて悲慘の底に沈む人あり。此種の悲劇ほど人をして崇高の念に打たれしむるものはあらず。此念はやがて又た其人の高き趣味を化生し來るなり。

◎人を判斷する所の尤も適切なる標準は趣味の高下なりとす。

◎若し人を上下に區別するの必要あらば趣味の上下に依て之を判するの一あるのみ、其他の區別は虛僞に近し。

◎植村正久氏は眞に余の師なり、何を以て之れを言ふ、彼は余に慨ぐに高上なる趣味の靈泉を以てせり。

◎「精力の發揮」といふ事に就き趣味を持つ人と持たぬ人とは其人の事業の上に大なる相違を來たす也。余は此事に關し、德富氏、「蘇峯」に由て得る所多きを思ふ者也。氏は「氣根强く其爲す所に從事す」てふことを以て甚だ好ましき事、美しき事、男らしき事となし、其趣味を深く感じ居るが如し。

◎多くの人の趣味に適ふ人あり、斯る人は其天性が多數平均の趣味に適ふ丈けの特質を有し居る也。其人の一生の事業の效果及び其人の天分の本質の高下如何は別問題として、兎も角も多數人に好愛せらるゝ丈けに實際界に立て便益するところ多し。幸福者也。

◎自己の趣味に適せざる或人の行爲を惡んで其極所に至るは餘り好ましき事に非ず。若し主客其地位を換へんか、初めて他が怨恨の情を悟り得ん。

◎或る上品なる趣味は時に彼が野蠻力を殺ぐ事あり。天禀の猛氣をして彈力なからしむる事あり。斯る場合には時として彼が事業の效果を減少する事あり、されど之れも

見様による。

◎趣味の進歩なき人は進歩なき也。老人の固定はこれが爲め也、則ち老いては他の趣味を吸入する力を減ずる也。他の趣味の感化を受くる觸力を減ずる也。先入の趣味彼のうちに凝定充實して他を納れ他と混和するの餘地なき也。或は情緒の冷却せるが故也。趣味は到底情緒の具體せるものなれば也。

◎貧すれば鈍する、趣味の下落せる也。されど富の重積の比例に依りて趣味は高上せず。

◎道義の面上には一種、窘迫苦痛の皺痕あり、此皺痕を蟬脫し、吾人をして爽快なる心を以て道義に對せしむる者は趣味也。

◎道義の反面には、やゝもすれば利得の誘惑あり、例せば勞作敎に伴ふ效果說の如し、吾人をして此誘惑を思はず面と面、樂んで道義に對せしむるものは趣味也。我知らず道を行ふことを樂ましむるものは趣味也。

◎惡嗜好は善趣味を害す。避けざる可からず。

◎甲乙の趣味は社會に於て相戰ひ、亦個人の胸底に於ても相爭ふ。動物慾は往々之が一方に援助す。

◎其人の趣味の複雜なる丈け其人の行動擧止云爲は複雜なり。されど趣味の複雜は必ずしもよみすべき事に非ず。

◎趣味はやがて信仰の門に達す。

◎高き清き溫かき趣味あふるゝ書籍を得て靜夜燈下に讀みたきものかな。この願も亦其の人の趣味の一なり。

◎人は自己の短所とする處を最も少く或は全く有せざる或人に對する時は、時に過分の價を其人の上に拂うて之を大なりとなす事あり。これ平常自己の短所を顧みる每に其反對の長所を慕ふの極、何時しか彼の趣味に於て養はるゝ所あるが故也。此種の趣味は必ずしも其人の實行の上に十分効果を見ざる也。之れ趣味の力よりも天稟の缺損甚しければ也。此缺損と此趣味とが其人の胸底に於て相せめぐ其戰は甚だ悲慘なり。これを意識する人は苦き苦き煩悶を重ぬ。されど此趣味なきに優るなるべし。

◎人は新に或高き趣味を得る程幸福なるはなし。一の趣味は一の世界なれば也。

◎「ふるゝ所の益」を知る者は、又、ふるゝ所の損を思はざる可からず。感染はふるゝ

所に依て通じ、趣味は感染するものなれば也。
◎人物の感化とは尤も適實なる趣味に於て、其人物の趣味の感化をいふ。」
◎趣味は趣味を作る。
◎趣味は偏す可からず。偏固の趣味は往々その人の天禀を缺損す。

不可思議なる大自然

（ワーズワースの自然主義と余）

余の如き實に言ふに足らず、余の如きが自然主義者であらうが、あるまいが、問題にもならないことで、それを自から彼是れと言ひ出すのは嗚滸がましき至りなるが、『早稲田文學』の新年號に於て島村抱月氏の『文藝上の自然主義』てふ有益なる論文中、「主義と名のつかぬ自然主義は早くイギリスのワーヅワースに端を發し」とありて、余をしてさてはと思はしむる所あり、從てこれに就て二言三言述べて見たくなつた次第である。一つには亦、昨年の秋『日本』新聞紙上に於て余と自然主義に關して多少自から說く所があつた其行がゝりからでもある。

『日本』新聞紙上に於ての余の所說を一括して言へば、「余は評壇から自然主義者なりと目せられて居るけれど、余自身從來の作物は、自然主義なるものの如何も知らず、只だ余の見る所、信ずる所に依りて製作せるものである、」との意に過ぎない。

余は同紙上に於て、これより以上の事は何も言はなかつた。即ち「余の見る所、信

ずる所」の其本源に就ては何も言はなかつた。

しかし德川文學の感化も受けず、紅露二氏の影響も受けず、從來の我文壇とは殆ど全く沒關係の着想、取扱、作風を以て余が製作を初めた事に就ては必ず其本源がなくてはならぬ。其本源は何であるかと自問して、余はワーヅワースに想到したのである。然も尙ほ余はワーヅワースが果して文學史上、自然主義と何程の關係を有し居るかなどの攻究はしなかつた所が、『早稻田文學』紙上に於て計らずも島村氏の、先に引いた言說を見て、さては余も遂にライダルの谷間から流れ出た自然主義の流を掬んのだのかとうなづいた次第である。

余が初めて短篇小說を書いたのは今より十年以前である。それより更に五六年前余は覺束なき英語敎師として豐後國佐伯町に一年間滯在して居たが、當時余は最も熱心なるワーヅワース信者で、而てワーヅワース信者に取りては佐伯町は實に滿目悉くワーヅワースの詩篇其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪流の奧に小村落あり、村落老いて物語多く、實にワーヅワース信者をして、「マイケル」の二三は此處彼處に轉がつて居さうに思はしめた位である。斯る場所に在て日夕ワーヅワースの詩篇に夢中になつて居た余が如何程までワーヅワースの感化を受けたかは當時の余の「日記」が說明して居る。今其の二三條を引く。

人若し我に向て汝が文學者詩人としての目的は何ぞやと問はゞ我れ答ふるに窮せざる也。

曰く此獨立の靈(ソール)が知り能ふ丈け、觀得る丈け、感じ得る丈けをありのまゝに筆にのぼすにあるのみ。

然り余は獨立にして自由なる一個の靈(ソール)なり、當に自由に觀、自由に感じ、自由に現すべし。

事實ありて意味あり、空想は意味に非ず、人生の意味は人生の事實の語る所なり、事實によりて意味を直覺する是れ靈妙なる人間の靈の妙機に非ずや、詩人是也。

多く見たり、多く聞きたり、思へば此等の事實悉く深き意味ある哉。

東氏の雇人爲(人名)の兄なる藏(くら)は盜みて獄に入りぬ。

石崎氏にごろつき居たる德は盜みて獄に入りぬ。
○○○、○○○○、○○○○○○(悉く人名なれど生存者なる故に祕す)其人物、
其經過、其經歷。

●一個人を深く能く觀ることは、あらゆる歷史を見ること也。
あらゆる宗教を見る事也、あらゆる詩歌を見ること也。
以上は明治二十六年十二月二十日より末日までの日記中より拔いたものであるが、其後一年餘り過ぎて余は、自から何をか書かんと、試に題材を選み記したるものを見ると、

◎芳島と女島との間の渡守り。
◎女島にて見たる水門を下せし若者。
◎船頭町より木立村の間を渡す舟子。
◎十二段(山名)の山腹にて逢ひし老樵夫。
◎こじき紀州(人名)

而て「日記」の一節に曰く「余は此の一個の人間を思ふ時は同情に堪へぬなり」と。以て如何に深く余がライダルの詩人に動かされて居たかゞ解るだらうと思ふ。

既にワーヅワース信者である限り、余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出來なかつた。人間と相呼應する此神祕にして美妙なる自然界に於ける人間なればこそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事實として余に現はれたのである。

其處で豐後に滯在後五六年の後、余は初めて『源叔父』なる小說を作り、其主人公の一人は乞食兒紀州であつたのである。

無論余は後年、ツルゲネーフも讀み、トルストイも讀み、モーパツサンも嚙りて其感化を受けたには相違ないが、以上の所說に依りて余は遂にワーヅワースの流を掬んでそれを信じて、それに依て立つた一人たることを證明して餘りありと思ふ。

然し今日我文壇に於て說かれて居る自然主義及び所謂自然派の作家がその作物に依りて示しつゝある自然主義と、ワーヅワースの自然主義とは餘程相違があるやうである。少くともワーヅワースは人と自然とを離して見ることは出來なかつた。此不思議なる大自然と人生とを別々にしては考へなかつた。然し今の我國の自然主義者には、

人あり、人生あり、これ迄世間則ち社會の裡に觀ることはしても、人間に取りては最も大なる事實なる自然の懷に觀ることは爲ないやうである。

余は此點に於て今も昔の如く、而して今後益々ワーヅワースの一句

On man, on nature, and on human life
Musing in solitude.——————

から離れたくないと願ふ。

悠久にして不思議なる、生死を吐呑する、此大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然、事實中の大事實、當面の眞現象に就ては何等の感想をも懷かない文人が、如何に巧に人間の事實を直寫したからとて、それは一藝當たるに過ぎない。斯くて文藝何の値ぞ、所謂自然主義何の値ぞ。

モデル問題

○余が轉地療養で暫く東京を離れて居る間に、モデル事件と云ふ珍問題が起つた、「自然主義」が問題になつた。文壇が俄にどよめいて來た。

○島崎藤村君がモデル事件の中心點となり、『並木』に初まり、『水彩畫家』にまで及んだ。そして波及して田山花袋君の『蒲團』も同題になつて來た。

○「モデル」事件が「自然主義」と必ず結びつけてある事を忘れてはならぬ。そして一考せねば此問題は解決が出來ぬ。

○次でモデルとは何ぞやといふ事をも考へねばならぬ。文人の所謂モデルといふ義と畫家のモデルと同一視して可なるや否やも考へねばならぬ。

○島崎君は果して「自然主義」に依て『並木』を書き『水彩畫家』を書いたのか如何か、これも考へねばならぬ。

○德富蘆花君の『不如歸』は○○家に關する私事を書いたものだといふ事は、誰言ふともなく殆ど公然の祕密になつた事實である、或る女學生が青山の墓地へ行つてお浪さ

んの墓に詣でたといふ珍話さへ傳へられて居る。其墓とは〇〇家の令孃の墓ださうな、然り而して『不如歸』はモデル事件を惹起さなかつた。

〇若し『不如歸』が近頃の出版であり且つ蘆花君が「自然主義」であると評壇から勝手に決定られて居たならば、蘆花君も亦藤村君と同一の問題を惹起して居たに相違ない。

〇「自然主義」とは人物事實のありの儘を直寫すると先づ大ザッパに解釋してかゝる、次に島崎君は「自然主義」であると獨斷する 次に島崎君は友人をモデルにしたとする。次にモデルは自然主義で取扱へば友人共まゝが現はるゝ筈だと論斷する、所が島崎君の書いた人物も事實も友人の人物と事實とは大いに異なつて居る、これ實にけしからん事で、迷惑至極、寃罪(丸山氏の言)も亦甚しいと怒る。すると第三者が出て來て全體小說家が友人や其他自分の身邊の人物や事件を種にするのは德義に反くと論ずる。さてこれ丈けの道ゆきを一見すると尤もらしく見えるが、悉くこれ假定に初まつて空論に終つては居ないか、よく初めから一々考へて見るがよい。

〇人間は「自然」を直寫し得る者でない。若しこれが出來るなら哲學も宗教も問題ではない。自然の奥には祕密がある。人は今以てこれに突入する事が出來ないのだ。然るに何で小說家が人間や人事の最後の祕密に入る事が出來るものか。自然がこれを許さない。詩人の書いたものが自然の作つたものと同一でないのは當然だ。自然すらも全く同一の者を二個作ることは出來ない。

〇そこで詩人は自らの自然を作るのだ。自らの人物を作るのだ。詩人の尊き所以はこにあるのだ。

〇『水彩畫家』は丸山某の傳記ではない、又丸山某其人がそつくり『水彩畫家』の一篇中に呼吸して居る譯ではない、傳吉は藤村君が作つた人物である、傳吉に伴ふ事件は藤村君が傳吉を作る爲めに、傳吉を現はす爲めに作つた事實である。所で、丸山某の行爲の節々が用ゐてあるとするならば、それは傳吉なる人物を描き出す爲めに用ゐた繪具の一種だ。繪具は繪其物ではない。

〇實際の人物と事件とを見て、詩人は其中に人生の意義の一端を發見する事がある。かゝる場合には其意義を現はす爲めに自から其見たる實際の人物及び事件を繪具の大部分に用ゐる事になる。而も尙ほ其作り出したる人物と事件は彼が想到したる意義を示すを目的としたるもので、決して實際の人物及び事件と全然同一たるを要しないし、

文實に同一なる能はず、結局、繪具を用ゐしのみにて繪其物ではない事に歸着する。

○試に問ふ、小說家が若し親ら見聞したる人物事件から、全く離れて製作したら何が出來るだらう、西鶴、門左が書いたものは全く架空の事だらうか。現代の多數の小說家が書いた小說は果して架空の事だらうか。古人は知らず今の世に藤村ならずとも所謂るモデルを實際の人物事實に採つた小說は澤山ある。それは當然の事で、それでこそ小說が人生の眞實に幾分でも觸れんとするのである。

○未だ言ひたい事は盡きないがこれで止める、又言つた事には異言を挿む餘地が多いけれど、其まゝにして置く、異言の出た場合に言ふ。

雜談

一體僕は大の無性者で、平生から讀書なんか餘りしない方だが、先づ僕の好きな作家を云へば「ツルゲネーフ」だらう。さう「ツルゲネーフ」の何う云ふ處が好きだと云つて、とても言葉ぢや云ひ現はせん。憖つか何うのかうのと言葉に云ひ現すと一種の型に入つたものになつて、眞に僕の感じてる其のまゝのもので無くなつて仕舞ふ。まあ好きだから好きと云ふ譯なんだ。

「ツルゲネーフ」の何の作が好きだと云つて別に取り出でゝ其と云ふ譯に可かんどの作にも、其れ相應の面白味がある　手取早く云つて見れば、「ツルゲネーフ」の作は、どれもこれも好きと云ふ譯なんだ。

先刻好きだから好きと云つたが强ひて云へば「ツルゲネーフ」のやうな自然人生の觀方、描寫の方法が氣に入つてるんだ。それに「ツルゲネーフ」の作にはバツクに深い悲哀が横はつてるやうに思はれる。――これは僕一人に然う感じられるのかも知れんが――此の點が誰よりも「ツルゲネーフ」の好きな所以だ。と云つて那樣に澤山讀んで居な

いが、兎も角非讀書子なる僕の好きな作家を擧げれば、「ツルゲネーフ」以外には無いのだ。

それはさうと玆に一つ近來の珍談がある。いつか『日本』へ「湯ケ原ゆき」を載せたとき、あのうちに義母のことを「悠然茫然泰然呆然」と書いたが、まさか分る氣遣ひもあるまいと、知らん顏で濟してると、惡事千里、何時の間にか、義母の親戚や知人の間に知れて、「悠然茫然泰然呆然」が、義母の通り名になつて了つた。するといつの間にか義母の耳へ入つたとも知らず、此の間妻を里へやると、散々の御不興で、顏を見ると突然こづき廻さん許りの見幕に、何も惡氣があつてやつた譯では無いから、後で良人をお詫びによこしますと云ふと、妾の前へでも來やうものなら、横腹を抉り飛ばしてやるからと、大に鼻息が荒かつたさうだ。今ではもう何でも無くなつたけれども、斯う云ふ話しをまた小說にでも作つて母に見せたら、何と云ふだらう。一寸面白いだらうと思ふ。

何日か『早稻田號』に書いた「B生より」、あれは那樣短かいもので、世間の受けも毀譽相半ばすると云ふ有樣だつたが、あれで非常に骨折つたものなんだ。何しろ身體が惡くて、長いものを書く精力は到底無い。其に原稿の締切期日は疾に過ぎてると云ふ次第で、優に百頁以上もある非常に長い豐富な材料を僅か四頁足らずのうちに纏めたのだ。主人公のおやぢの會話や、魚釣場の光景など、筆を執ると歷々として眼前に浮んで來る。あれを書き終つたときは、實際二百頁位のものを書き上げた位の氣持がした。さう、正味あれの爲めに費した時間は二日だが、他の人ならあの位の長さのものなら、二時間もあれば出來るだらうと思ふ。

何も自慢するぢやないが、兎に角、あれ丈のことを、あれ丈けのうちに書き顯はすには、隨分苦心したものだ

其につけて思ひ出すのは、今の若手作家の傾向だ。何と云ふだらしの無い書き方だらう。愚にもつかんことを、だら〳〵と繰り返し捲き返し書きのばす。一體何う云ふ積りだらう。之では世間のものが當てられるのも無理は無い。もう些と簡潔な引き緊まつた書方が出來ぬものだらうか。

予が作品と事實

一

余が今日まで書いた小說は最近の數篇を除けば、『武藏野』『獨步集』『運命』『濤聲』の四冊に網羅してある。これを分類すると、第一、全く空想から人物も事件も出來上れるもの。第二、實際の人物若しくは事件にヒントを得たもの。第三、事實の人物と事件が其小說の主要部を成せるもの。第四、實際の人物及び事件を其まゝ描寫したもの。先づ此四種の外に出でない。若し人物と事件を別々にして分類すれば更に細に類別し得られるが、煩はしいから大體右の四種にして置く。併し此四種は豈にたゞ余のみならず、大概の作者は皆同樣であらうと思ふ。

二

余は今日まで所謂短篇小說ばかり書いて來たが、短篇の中にも長短あり、其長短數十篇の中にも第一に屬するものは極めて僅である。第二第三が最も多數。第四も亦甚だ少ない。

其處で今思ひついた作物に就て簡單に說明すると、處女作の『源叔父』(武藏野)は源叔父其人も「紀州」と稱する乞食の少年も實在の人物で、余が豐後の佐伯町に居た時分常に接近したばかりでなく、其の身の上に就て深く同情を寄せたことのある人物である。而して此一篇中に記述した此兩人それ〴〵の身の上の事も事實である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一篇が作品となつたのだ。

『運命』中の「酒中日記」は、チョツとしたヒントが基となつた作物で、此一篇に記述した事は、悉く余の拵へた事である。主人公の小學校々長に似た實在人物及び小學校新築といふ事實に觸れてそれが基となり、余の想が出來たので、實際の小學校々長は今も健在である、校舍は早く落成して今は多數の兒童を收容して居る。

『富岡先生』(獨步集)は、長州で有名な富永有隣翁である。翁は最早死んだ。余が周防熊毛郡に居る時分、此翁は田甫の中の一軒屋に孤獨の生活を送つて、三四の少年に漢學を授けて居つた。余の描いた富岡先生の性格は、此有隣翁をモデルにしたので、鄕里出身の榮達者に對しての態度などは、有隣翁の逸話を基にしたのである。けれども、

梅子と云ふ娘は、實際有つたのではなく、從つて、一篇に記述した事件のある筈はない。

『春の鳥』(獨歩集)の主人公、白痴の少年は、余が豐後佐伯町に居つた時親しく接近した實在人物で、其身の上話は皆事實である。只城山で悲慘な最後を遂げたと云ふ事だけは余の想である。余は此少年を非常に氣の毒に思ひ、自から進んで其教育に從事して見た事もある。數の觀念が全く缺けて居るので、如何にもして此缺陷の幾分なりとも補ひくれようと種々の手段を採つた事もあるが、悉く徒勞に歸した。そこで余は當時白痴者に就いて深い同情と興味とを持つて、人間と鳥獸の差別、生物と宇宙の關係など、隨分城山の上で空想に耽つたものだ。そして此一篇は七八年の後に出來たのである。

『巡査』(運命)は全くの寫生である。本名は高野氏。余が西園寺侯の家に寄食してゐた時、侯は總理大臣代理であつて三四人の護衛巡査が居た。其一人が高野氏で、何時しか余と別懇になり余は氏の經歷及び人物を知るに從ひ頗る興味を持つて來た。そこで氏が頻りに勸めるので、或日氏の寓居を訪うた。余は初めから寫生して見る積りで訪問したのだから、寓居の模樣、居室の體裁は勿論、氏の一擧一動等を十分注意して觀た。そして氏が机の抽出から自作の『警察論』の一篇を出しかけて引込め、見せたくもあり見せたくもなき樣子を余は看取して氏をそゝのかし、遂に之を朗讀させ、其の他氏の自作の漢詩も皆な余が材料にしてやらうといふ一心からこれを朗吟さした。そして一寸それを拜借と輕く所望して、此等の原稿を持ち歸り、以て此一篇を書いたのである。若し此等の原稿を材料としないで此一篇を書いたら骨拔き同樣であらう。

寫生文なんて、くだらないものだ。どうかすると新聞屋の探訪だ。けれども余の此一篇が氣に入つたと云ふ知名の作家もあるやうに聞いたが、世は樣々だ。七八年の後、初めて作品になる者もある。手帳さへあれば直ぐにでも出來る作品もある。余が此一篇も直ぐ書いて大阪の或雜誌に載せ、それを高野氏に見せたら「とう〳〵種にしましたな。」と笑つてゐた。

此巡査如きが若しお望みなら手帳を與へよ。きよろきよろせしめよ。記憶に止め難き故事來歴、手紙の文句など是非必要ならば、一寸拜借とでも言ふべし。本願寺の瓦の大きさが解らずば梯子をかけて上るべし。實にくだらないことだ。

寫生文など言はずに手帳文と言つた方が直截のやうな氣がする。

『第三者』(獨歩集)は似寄りの事實があつて、余は第三者の心配をさせられた。けれども此篇に表はれた男女兩主人公の性格と實際の人物とは決して同じでない。たゞ幾分か似通うて居るといふに過ぎない。殊に男主人公の云爲の中には余自身の閲歴すら雜つて居る。

そして此一篇は二個の主人公があるやうに見えるが、女主人公の方が重なので、男の許から逃げ出した當世娘を書くことに力めたのである。されば男主人公よりも、より多く女主公は實在人物に近いのである。余は此篇で逃げた人を書いた。此次には逃げられた人を書いて見たいと思つて居る。女に逃げられた男、弟子に逃げられた先生、いろいろ意味の深い事實がある。

『空知川の岸邊』(運命)は小説とは言ひ難いかも知れぬが、さりとて紀行文の積りで書いたものではない。けれどもトルストイ翁のコーカサスの囚人を小説と言ひ得るなら、これも小説と云つてよいだらう。

此篇の主人公は余自身で其事件は皆事實である。主人公の感想は余の感想であるこ

とは云ふまでもない。

「あの時分」(濤聲)は、全く余が早稲田に在つた頃を思ひ出し、なつかしさに堪へないで書いたもので、事實が八分ならば多少の附加(つけくは)へが二分。しかし心持は少しも變へてない。

「私」は則ち余自身。

同じく『濤聲』中の「帽子」は夢を書いたのである。帽子の主人公は一夜余の夢を襲ひ、夢さめて後、余をして戰慄せしめた人物で其夢中の事實は心理狀態として余に多大の興味を持たしめたのである。余は夢を見て直ぐ其夢を面白しとして書いたのではない。余は數ケ月の間、此夢を忘るゝ事が出來ず、考へ考へた果てが遂に此一篇に成つたのだ。

この篇は第一、第二、等三、第四の何れに入れて可なるやを知らず。

『獨歩集』中の「牛肉と馬鈴薯」の主人公岡本誠夫の性格は、余が好むまゝに描いたものだが、彼の演説は余の演説である。而して北海道熱は余自身の實歴で、空知川の岸邊は此實歴の實證である。又此篇に現はれた四五の紳士は皆な實在の人物を借り來つて多少とも其俤を寫したのである。則ち「竹内」は竹越三叉君。「綿貫」は渡邊勘十郎君。

「井山」は井上敬二郎君。「松木」は松本君平君。而して此等の諸氏は實際櫻田本郷町の河岸にあつた倶樂部で常に氣焰を吐いて居たものだ。

「上村」と「近藤」は余の或趣味を表はした想像人物である。

三

要するに余の經驗に依ると、實在の人物實際の事件は如何に面白く思はれても、之れを直ちに筆に上すは眞の詩を得る道ではない。必ずこれを心底最も深き處に藏して其醱酵を待たなければならぬ。然らざれば、其詳細の事實は忘却し易いから、寫生文とは緣が益々遠くなるかも知れぬが、人生の眞に觸れた詩を得ることに於て途は此外にあるまいと思ふ。

然らば余の長短數十篇は悉く然るかといふに決してさうでない。大多數は事情に迫られ、時を限られ、不滿で書き上げて、先づ〳〵此場合此丈けの辛苦ならば、此位の作が相當であらうと自ら理窟をつけたものばかりと云つてよい位ゐだ。

製作上の理想は美であるが、實際は遠く及ばない事が作詩の上にも在るとは情けない次第である。

机は部屋の置物

◎私は机に向ふことがメツタにない、机は只だ私の部屋の置物たるに過ぎぬ。

◎そんなら小說などを書く時は何うするかとの疑問も起るだらうが、私は今日までそんなに澤山小說も其他の文章も書いては居らぬ。私がこれまで書いた物の分量を十年の歲月に割り當てゝ見ると實に僅少なもので恐らく一日三行にも當るまいと思ふ。

◎そんなら讀書は何うするかとの疑問が次に起るだらう。所が讀書と來ては尙更ら机と緣が薄い。元來私は讀書なるものをしない方で、田山花袋君の百分の一も本は讀んで居らぬ。其他の友人と比較しても其十分の一、五十分の一も六つかしからう。たまに讀む事があると、多くは柱に寄ツかゝつて讀むか、床の中で讀むか、寢そべツて讀むか、兎に角極めて不規則で、正座机に對して讀書するなどゝ云ふことは、昔バイブルを毎朝讀んだ時の外にはない。

◎であるから「机に向ふ時の心持」といふやうな經驗が極めて少ない。其机に向ふ時は必ずのツぴきならぬ場合に限るから、愉快も不愉快もない。そして書いて居る中にイ

ヤになつたら直ぐ止して了つて座敷の内をごろ〳〵して居るか、庭をうろ〳〵して居るかだ。其中又興が來ると直ぐ書きつゞけるので、其間自分の書いて居るものゝことばかり考へて居るから「机に向ふ」といふ特種の感じの起らう筈がない。尤も日課のやうにして書き續けて居る人なら、毎日、サアこれから書くのだと机に向ふから、其日毎に感じも違ふだらう。私にはそれがない。

◎私も「明窓淨机」といふやうな趣味を實現し得るなら結構であるが、習慣と生來のだらしなさとで、左樣いふお人柄の好いことの出來ぬのは眞實、幸福とは申されない。

◎が之は「机に向ふ時の感」であつて「机に向つて居る時の感」ではない。私とても机に向つて居る時の心持の實驗談なら、多少か持つて居る、何故なら机に向ふ時の感は刹那の感であるが、對つて居る時の感は時間が長いからだ。

奈何にして小説家となりし乎

自分が小説家であるか、無いかゞ先づ第一の問題です。世間が自分を小説家であると決めて居るなら、其も致し方がありません、喧嘩にも成りません。元來自分は小説家であるを書いて其で一身を立てやうなどゝは、少年の時も青年の時も夢にも思つたことが無いので、其で小説家と若し世間がみとめて居るなら、其は自分が取るにもたらぬ、三ツ四ツの短い物語りを書いた結果でありませう。其れならば自分に對する問題の適切なる意義は、「我は如何にして二三の小説を書きしか」と、言ふ事に成るだらうと思ひます。さうです「家」であるか、「家」で無いかは問題の外と致しまして、兎も角も「如何にして二三の物語りを書きしか、而して、世間から小説家であるとみとめらるゝ男と成りしか、」といふ問で答へる事に致しませう。

全體自分は、功名心が猛烈な少年で有りまして、少年の時は賢相名將とも成り、名を千載に胎すといふのが一心で、ナポレオン、豐太閤の如き大人物が自分より以前の世にあつて、後世を壓倒し我々を眼下に見て居るのが殘念でたまらないので、半夜密

かに如何にして我れは世界第一の大人と成るべきやと言ふ問題に觸着つてぼろ〳〵涙をこぼした事さへ有るのです。けれども今から思ふと世間の少年は十の八九、皆かくの如き取り止のない、馬鹿々々しい、比較根性から出た妄想で、つまりは、坊の蜜柑の方が小さいとか大きいとか言つて泣いたり、わめいたりする動物體の發作に、過ぎぬのでありませうが、何でも彼でも兎も角も、其の發作で心を動かして居たのですから、物語を作つて一生を送るなど言ふ事は夢にも思はず、思はないばかりではなく寧ろ男子の恥辱と迄思つただらうと思ひます（實際、其處まで思つたか思はないかすら、記憶に無いのです）。つまり文章家、小說家など言ふものは、絕對に眼中に無かつたのです。處が、自分の精神上に一大革命が起りました。即ち、人生の問題に觸着つたので有ります。謂ゆる「我は何處より來りし」「我は何處に行く」「我とは何んぞや」（What am I?）との問題に觸れたので有ります、其で如何にしてかゝる問題に觸れたかと言ふ事は、此處で申上る場合では有りませんから止しますが、何しろ結果は即ち精神上の大革命でありまして、今迄の大望が、がらり破れて仕舞つたのです。ナポレオンも秀吉もいつかう豪く無くなつて了つたので有ります。若し豪いならば其豪いと言ふ意義がまるで違つて來て比較根性から出た意義、功名、利達の意義に成つて仕舞つたので有ります。

當然自分の對手が以前と全で異つて來ました。以前は自分と世間とが常に相對して居たのが、今度は自分と此人生、自分と此自然とが相對して來て、自分の心は全たく其方に取られて了ひました。そこで讀む書が以前とは異つて來る、以前は憲法論を讀み經濟書を讀み、グラツドストンの演說集を讀み、バーレーの英國史を讀んだ自分は、知らず〳〵此等を捨てゝカーライルのサルトルレザルタスを讀み、ワーズヲースの詩集にあこがれ、ゲーテを覗き見するといふ始末に立到りました。斯うなると、自分は哲學と宗敎との緣を離るゝ事が出來なくなり、基督敎にて示された宇宙觀、人生觀などが寢ても覺めても自分を或は惱まし或は慰め、それに心を奪はれて實際の事は殆ど手にもつかぬ場合もありましたし、自然、自分は宗敎家にならうかと思つた事もありました。

斯ういふ境遇に陷つた青年は當時、自分ばかりでなく、外に幾人もあります。自分の友達の中にもあります。そして終極皆な何うなつたかと申しますと、遂に宗敎家に

なつたものもあり、語學か倫理の教師になつたものもあり、そして文章を書くのが本職になつたものもあり、先づ此の三類の一に大概は落着て了つたのです。或は未だ何れにも落着かないものもあります。そして自分は文章に緣多き方に來て了つたのです。又教師を爲た事もあります。要之、煩悶ばかりして居る譯に行かなくなり、パンを口に入れる道を急ぐ場合となれば、先づ其時分の自分の如き種類の青年は、教師にでもなるか、宗教家を本職とする外には使ひ道がないのでありました。

所が哲學とか宗教とかを、ひねくつて居ると、自然文藝に緣が付いて來るもので、カーライルの如きも同じ道行で終に文學者になつて了ひましたから、自分も我知らず何時の間にか書いて見るやうになつて、從つてそれが、身を助ける藝になり、パンを得る唯一の手段となつて了つたのです。

親父の脛を嚙りながら二十一、二歳まで東京で煩悶を行つて居ましたが、それも出來なくなりまして遂に矢野龍溪先生の推薦で先生の鄕里、豐後の佐伯で英語の教師をやつて一年許り居ました。此靜閑なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、ワーズヲース信者となり、明けても暮れても溪流、山岳、村落、漁村を遍り歩き、溪を横ぎる雲に想を馳せ、森に響く小鳥の聲に心を奪はれ、そして同時に、『牛肉と馬鈴薯』(自分の書いた小說)の主人公、岡本誠夫の煩悶を續けて居ましたので。其當時です、德富蘇峯先生に書狀を出して自分は最早、政治には少しも趣味を有たなくなつたと言ひ送りましたら、先生から教訓の意味の返事が來たことがありました。實際、それほどまでに自分の心が現代の問題から離れて了つたのです。そこで一年ばかり教師を爲て居る中に、生れついた鬱勃の念が抑へきれず、遂に又た東京に飛出て來て、入社したでもなく、只だ蘇峯先生の愛顧に附込んで民友社にもぐり込みました、(もぐり込むと言へば變ですが、當時の民友社の同人は、大概もぐり込んだので、今日唯今より入社、月給は幾干などいふ手續きは無いやうでした。) 民友社といへば、當時文藝の本場で、『國民之友』は文壇の最高位を占めて居たといつても宜しい位、その社へ自分が入つたのが卽ち自分と文藝との緣を確實に結びつけた原因であります。

その後の自分の經歷に隨分波瀾がありましたが、つまり、『國民之友』といふ當時文壇第一の雜誌に隨意に書けるといふ特別の事情で、自然筆も達者になり、卽ち藝が上達する、從つて面白味も出て來る、遂には此藝の外、何一ツ飯を喰ふ藝がなくなつて、

從つて喰へなくなると直ぐ此藝を出して來ました。

誤解されては困ります。自分は今日まで衣食を得る方法として文章を書いたといふ丈けの事で、卽ち自分の實際を申上げたので、『文藝は衣食を得る藝當に過ぎず』などとは夢にも思ひません。文藝それ自身の目的の高尙なる事は承知して居ます。又自分の作物は自分が心眞に感得し得たるを正直に書いたもので、それが文藝の光輝を幾分か發揮し得て居るといふ自信及び滿足も持つて居ます。

どうか自分も今後益々奮つて我が製作を世に出さうと思つて居ます。若し自分が小說家ならば、今後益々小說家の本分を盡さうと思つて居ます。

たゞ自分は、人生問題に煩悶した當時の我から全く離れて、ただ文藝の爲めに文藝に埋れ度くありません。「人生の研究の結果の報告」といふ覺悟は何處までも持つて居たいのです。

附錄

國木田獨步氏の病狀を報ずる書

眞山靑果

第一信

風葉先生足下

昨日午後五時四十分茅ヶ崎着、直ちに南湖院を訪ふ。土産物は御依託のトマト、新潮社の牛肉、亞米利加蜜柑、梨子。そして大船の押し鮨を一箱、これは晩酌のかてにと私かに樂みにして居たのを、ツイ口の辷つたのが災難、散々賞められて、そやされて、果ては湯河原行きの當時この鮨に關する逸事譚まで長々と聞かされて、到頭代物は沒收されて了つた。人の惡るい病人かな。

僕の顏を見て獨歩氏は果して大喜び、今朝から僕を言暮らしたと云ふ。昨夜不眠の祟りが今來て、今日の午後は咳嗽の頻出と呼吸の困難とで、此頃中に無き大苦患であると云ふにも拘らず、對坐半時間とも經たぬ間にそれも治り、例の元氣な調子に復し、鋭き氣焰も出で、そして例の鮨三片に近頃での好晩餐を濟したと喜んで居られる。そして、「待つて居た、待つて居た。」と繰返し〳〵云ふ。全るで骨肉の弟でも待つて居る樣子である。

風葉先生、貴方だけは知つてるだらう。僕は唯一人の亡祖母の外、嘗て何人にも待たれ便られた事の無い人間です。親、兄弟、鄕黨、何人にも待たれぬ苦しき廓寥に忍びかねて、纔かにその鬱悶を酒にその他に遣つて居る人間です。先生一人に待たるゝを慰藉に、辛じて自棄自暴を免れて來た人間です。嗚呼、僕の世は寂しい。それを今、國木田獨歩氏と云ふ他の一人を得たのだ。而かも獨歩氏は僕年來の崇拜者、正直を云ふと、憎い口惜しい崇拜者である。その崇拜者を先生以外の一人に得た。それも健康の日には相見えるの機すら無く、不幸湘南の病舍に相待たるゝ事となつた。獨歩氏の語を藉りて云へば、因緣、實に奇しき因緣である。先頃もお話しせる如く、僕はこの知遇に酬ゆるには、如何なる難澁事をも辭せぬ覺悟である。先生、貴方も喜ぶだらう、喜ぶだらう。僕は涙が出る。僕は獨歩氏の確實なる快癒を見ぬ間は、何事にもこの地を動くまいと思ふ。留守の家の事は確とお願申した。

奥樣の話には、長く病牀に片寢をした結果、右の肋膜に微少な炎症を起してると醫者は云ふさうだ。咳嗽その他の症狀も無論それに續發增進されたに相違ない。然し當人は相變らずの元氣で、肋膜ぐらゐは何んだ、糞を喰へと云つた氣で居る。大丈夫、この元氣があれば大丈夫、熱も多少ある樣子だが、然う大した事はないらしい。

元氣も元氣だが、喰べる事も好く喰べる、喋ると喰べる、此二つの精力には驚くの外無い。昨日も些いと一時間ほど居る間に、紅茶、パン、パイナップル、鮨を三切、これだけ喰べた。